一般社団法人日本生態学会
ニュースレター
No.48
2019年5月

［目 次］

2019 年 10 月選挙実施のお知らせ 1
日本生態学会各賞候補者募集 2
第 67 回日本生態学会大会案内 6
第 66 回日本生態学会大会（神戸）開催報告 12
神戸大会におけるキャリア支援専門委員会活動報告 14
キャリア支援専門委員会 2019 年男女共同参画フォーラム開催報告 16

記事
Ⅰ. 一般社団法人日本生態学会 2019 年度定時総会、代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項 18
A. 報告事項 18
B. 審議事項 28
Ⅱ. 第 66 回日本生態学会大会記録 32
Ⅲ. 業務執行理事の選任について 38
Ⅳ. 書評依頼図書 38
Ⅴ. 寄贈図書 38

書評 38
日本生態学会役員・代議員・委員一覧 41
京都大学生態学研究センターニュース 44

2019 年 10 月選挙実施のお知らせ

2019 年 10 月に定款第 6 条、29 条ならびに「一般社団法人日本生態学会役員・代議員選任規則」に従って、日本生態学会の次々期会長（理事兼代表理事）候補者と次期代議員の選挙を行います。投票方法は、(i) ウェブサイトからの電子投票、あるいは（ii）郵送投票のどちらかを選択できますが、（ii）郵送投票を希望される方は【8 月 31 日（土）必着】で学会事務局まで**郵送・E-mail または Fax** にてご連絡ください。

日本生態学会事務局
〒 603-8148　京都市北区小山西花池町 1-8
E-mail: office@mail.esj.ne.jp　Fax:075-384-0250
※ 連絡の際には【必ず**会員番号**と**お名前**】をお知らせくださいますようお願いいたします。

〔重要〕郵送投票を希望した方は電子投票を行うことができません。
開票作業省力化のため、ウェブサイトからの電子投票にご協力をお願いいたします。

日本生態学会各賞候補者募集

第 18 回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第 24 回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 13 回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 2 名の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 8 回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後 4 年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、各々 5 万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト（http://www.esj.ne.jp/esj/）よりダウンロード
3. 送付先：

   （郵送）〒 603-8148　京都市北区小山西花池町 1 － 8
   日本生態学会事務局気付
   日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
   （〇〇は応募する賞名を入れて下さい）

   （電子メール）office@mail.esj.ne.jp
4. 締め切り日：2019 年 8 月 19 日（月）必着

日本生態学会賞細則

第 1 条　日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として 1 名とする。

第 2 条　日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。

第 3 条　委員会の委員は代議員の推薦により 9 名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は 3 年とし、毎年 3 名を改選する。ただし任期満了後 2 年間は再任されない。

第 4 条　推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。

第 5 条　委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。

第 6 条　選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第 7 条　会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第 8 条　受賞者の決定は、受賞式が行われる 3 ヶ月前までに行う。

第 9 条　授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。

第 10 条　受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。

第 11 条　この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞細則

第 1 条　日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として 3 名とする。

第 2 条　宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第 3 条　委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第 4 条　委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。

第 5 条　選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第 6 条　会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第 7 条　受賞者の決定は授賞式が行われる 3 か月前までに行う。

第 8 条　授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金 10 万円を贈呈する。

第 9 条　受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第 10 条　この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞細則

第 1 条　日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として 2 名とする。

第 2 条　大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第 3 条　委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第 4 条　委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。

第 5 条　選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第 6 条　会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第 7 条　受賞者の決定は授賞式が行われる 3 か月前までに行う。

第 8 条　授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金 10 万円を贈呈する。

第 9 条　受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。

第 10 条　この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

第 1 条　日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後 4 年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として 3 名とする。

第 2 条　奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。

第 3 条　委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第 4 条　委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。

第 5 条　選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第 6 条　会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第 7 条　受賞者の決定は授賞式が行われる 3 か月前までに行う。

第 8 条　授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金 5 万円を贈呈する。

第 9 条　受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。

第 10 条　この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第 67 回日本生態学会大会（名古屋）案内

第 67 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ67）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。詳細は次号のニュースレター又は下記の大会公式ホームページで随時ご確認下さい。

※ 本大会は、前回神戸大会で実施された変更（シンポジウム＋自由集会、自由集会聴講券の発行、シンポジウム・英語口頭発表賞の事前申込不要、日本分子生物学会との学会連携など）を踏襲します。

日程・会場

2020 年 3 月 4 日（水）～ 8 日（日）
名城大学天白キャンパス（https://www.meijo-u.ac.jp/about/campus/tempaku.html）

第 67 回日本生態学会大会（ESJ67）実行委員会

大会会長：日野輝明（名城大学）、大会実行委員長：橋本啓史（名城大学）
大会公式ホームページ http://www.esj.ne.jp/meeting/67/

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします。

提案・申込の受付開始・締切

【受付開始】

新規入会・再入会申込	随時
大会参加・講演・企画など申込	締切の 1 ケ月程度前から
ER 招待講演を希望するシンポジウムの事前応募	締切の 1 ケ月程度前から

【締切】

ER 招待講演を希望するシンポジウムの事前応募	2019 年 8 月 30 日（金）23:59
シンポジウム・自由集会の企画提案	2019 年 10 月 31 日（木）23:59
一般講演申込	2019 年 10 月 31 日（木）23:59
英語口頭発表賞申込	2019 年 10 月 31 日（木）23:59
ポスター賞申込	2019 年 10 月 31 日（木）23:59
高校生ポスター発表申込	2019 年 10 月 31 日（木）23:59
講演要旨登録	大会の約 1 ヶ月前（予定）

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。
※発表申込のための生態学会への新規入会申込も、10 月 31 日（木）23:59 まで可能ですが、新規入会申込を行ってから発表申込をする必要があります（発表申込が 23:59 を超えてはいけません）。新規入会者は講演要旨登録の締切日までに会費を支払い、学会員となっていただく必要があります。
※各締切日の 17:00 ～ 23:59 はお問い合わせに対応できません。様々な手順の確認はお早めにお願いします。
※すべての締切に関して、**締切後の追加や修正等の依頼には対応できません。**

日本分子生物学会との学会連携

日本生態学会と日本分子生物学会は 2020 年 3 月末まで、学会連携を行っております。それに伴って、本大会においても引き続き、分子生物学会員との共同でのシンポジウム・自由集会の企画、および講演が可能です。分子生物学会員については、自由集会においても招待による講演が可能となります（シンポジウム招待講演者と同等に扱う。大会参加費は無料）。分子生物学会員を含めた、集会企画の提案をお待ちしております。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。企画・講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧下さい。

講演種別 ＼ 会員種別	正会員	非会員	分子生物学会員
一般講演（口頭・ポスター）*1	○		
シンポジウム・自由集会の企画 *2	○		○ *5
シンポジウム講演 *1	○	○ *4	○ *6
自由集会講演 *1	○		○ *6
シンポジウム・自由集会のコメンテータ・意見表明 *3	○	○	○

*1　講演の主たる説明者を意味します。共同発表者は正会員である必要はありません。
*2　共同企画者も正会員もしくは分子生物学会員に限ります。
*3　要旨を登録しないコメンテータや意見表明を指します。要旨登録を行う場合は「講演」となります。
*4　企画者に招待された方に限ります。下記「シンポジウムの募集」の「企画内容について」の第 2 項目をご参照ください。
*5　シンポジウム招待講演者と同等の扱いとなります。
*6　招待講演扱いとなります。

・**非会員が講演・企画を希望される場合（シンポジウムでの招待講演を除く）は、講演・企画申込み前に学会への新規入会申込を行い、大会開催日までに会費を納入して学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。**
・高校生ポスター発表会に参加される高校生（中学生含む）については、高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学」の案内をご覧下さい。
・非会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆としてすべてのプログラムに参加できます。
・自由集会のみを聴講する場合は自由集会聴講券を利用可能です（詳細は、大会参加費の項をご覧下さい）。

大会参加費・懇親会費

・**大会参加費・懇親会費は、学会費と別に納入していただきます。**詳しくは、次号のニュースレターでお知らせします。
・学部生の参加を促進するために、大会参加費の無料化を予定しています（学生証提示・当日受付のみ）。プログラム冊子の配布はありませんので、必要な方は別途ご購入ください（販売額は 1,000 円を予定）。
・自由集会のみに聴衆として参加する場合には、会員･非会員問わず自由集会聴講券（1,000 円）を利用可能です。自由集会聴講券は、大会期間中複数日にわたって利用できます。ただし、自由集会と公開講演会以外のプログラムは聴講できません。プログラム冊子の配布はありませんので、必要な方は別途ご購入ください。
※ESJ65 までは自由集会のみの聴講は無料でしたが、ESJ66 から有料**（大会期間を通じて使える自由集会聴講券（1,000 円））**となっておりますので、ご注意ください。

公開講演会

日本生態学会第 23 回公開講演会
講演会タイトル：「草原の 1 万年史　ひとがつくってきた生態系」
日時：2020 年 3 月 8 日（日）
会場：名城大学天白キャンパス（https://www.meijo-u.ac.jp/about/campus/tempaku.html）

内容の詳細については、次号のニュースレターでお知らせします。

シンポジウムの募集

ESJ67 では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約 3 時間の予定です。
※ESJ66 からはシンポジウム企画の事前提案は必要なくなりました。ただし、**ER 招待講演を希望する場合は 2019 年 8 月 30 日（金）23:59 までの事前応募が必要**となります。

【企画内容について】

・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の非会員の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者の大会参加費は無料となります。ただし、同一の非会員による 2 年連続の招待講演はできませんのでご注意ください。
・ESJ67 では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち 1 名以上を Ecological Research 誌による招待講演者（ER 招待講演者）として採用予定です。ER 招待講演者は旅費の支給を受ける事ができ、大会参加費も無料となります。大会後にシンポジウム内容に関連したレビュー論文もしくは特集論文などを Ecological Research 誌に投稿していただくことが原則となります。
・若手研究者からの意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者どうしの研究交流が進むことを目指して、ESJ67 では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。
・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや二か国語スライド等は、英語開催のシンポジウムにおいて非英語話者の参加を促すのにも有効です）。

【応募要領】

・シンポジウムの応募締め切りは、**2019 年 10 月 31 日（木）23:59** です。具体的な申し込み方法は次号のニュースレター、および 9 月下旬頃に大会ホームページでお知らせします。
・なお、ER 招待講演者による講演を希望するシンポジウムは、**2019 年 8 月 30 日（金）23:59** までの事前応募が必要となります。具体的な応募方法は 7 月下旬頃に大会ホームページでお知らせします。
・大会企画委員会は内容に関与しませんが、個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるシンポジウム企画は採択されないことがあります。

【応募の制限について】

・企画者（共同企画者も含む、以下同様）は日本生態学会正会員もしくは分子生物学会員に限ります。非会員は企画者になれません。
・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。
・シンポジウムの企画者・講演者は、自由集会の企画者・講演者、一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者になることはできません。
・要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、講演には数えません。そのため、要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、発表の重複制限の対象とはなりません。

自由集会の募集

ESJ67 では自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。自由集会の開催時間は約 1.5 時間の予定です。

※ESJ65 までは、自由集会は大会の公式行事でなく関連集会でしたが、**ESJ66 からは大会の公式行事となり、自由集会のみの聴講も有料（自由集会聴講券 1,000 円）**となりましたので、ご注意ください。

【企画内容と応募の制限について】

・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。
・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のほか、個別の講演の要旨も、プログラムと講演要旨集に掲載されます。
※ 自由集会の公式化に伴い、要旨登録を行う講演をすることが可能になりました。
・企画者（共同企画者も含む、以下同様）は日本生態学会正会員もしくは分子生物学会員に限ります。非会員は企画者になれません。
・講演者は日本生態学会正会員もしくは分子生物学会員に限ります（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意

味します。以下同様)。非会員の方に招待講演をしていただくことはできません（要旨登録を行わないコメントや意見表明は可能です)。
・自由集会の企画者・講演者は、一般講演（口頭発表もしくはポスター発表）のみ、重複して講演することができます。
・自由集会の企画者・講演者は、シンポジウム及び他の自由集会の企画者・講演者となることはできません。
・要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、講演には数えません。そのため、要旨登録を伴わない趣旨説明、コメント、意見表明などは、発表の重複制限の対象とはなりません。

【応募要領】
・自由集会の応募締め切りは、2019 年 10 月 31 日（木）23:59 です。具体的な申し込み方法は次号のニュースレター、および 9 月下旬頃に大会ホームページでお知らせします。
・大会企画委員会は内容に関与しませんが、個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断される自由集会企画は採択されないことがあります。

【自由集会の採否について】
・自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、**抽選で自由集会の採否を決定します。**
・開催の可否については、締め切りの約 3 週間後にメールでご連絡します。

大会シンポジウム・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。	様々な話題を自由に議論できる場。
開催時間	約 3 時間	約 1.5 時間
開催の優先度	最優先されます。	会場が足りない場合は抽選で採否を決定します。
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます)。	夕刻を中心に、シンポジウムの枠が空いている日時に割り当てられます。
企画委員会の関与	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します。	
企画者の資格	正会員もしくは分子生物学会員	
非会員による講演	奨励します（招待講演者として参加費を免除します)。	認められません（要旨登録を行わないコメントや意見表明は可能です)。ただし、分子生物学会員については招待講演が可能です。
海外からの ER 招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で 1 名以上認められます。	なし。
企画者・講演者の一般講演	不可	可（分子生物学会員を除く）
企画者・講演者の他集会の企画・講演	不可	
提案締切日	10/31（木）	
概要登録 / 集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	10/31（木）	
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます。	

フォーラム

・学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。フォーラムの申し込みは各委員会代表者が行います。
・フォーラムの開催希望について 8 月頃に学会事務局から聴き取りを行いますので、それに対して企画提案をしてください（締切 2019 年 9 月 15 日（日))。企画案は、理事会での審議にかけられ、最終的に大会企画委員会および実行委員会との調整の上で、最終的な採択の可否が決定されます。これらの協議の過程で、内容の修正や開催形態の調整を求められることがあります。
・フォーラムの開催時間は約 1.5 時間の予定です。

一般講演

・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きしますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
・発表内容に応じて会場･時間の割り振りを行いますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。
・口頭発表では、英語での発表･討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。また、英語による発表を集めた「英語口頭発表枠」を選ぶこともできます（発表内容に応じた分野分けも行います）。この場合は、下記の「英語口頭発表賞」にエントリーした発表と共にセッションを構成します。

注意：
・一般講演の講演者（主たる説明者、以下同様）は、日本生態学会の正会員に限ります（共同発表者は正会員である必要はありません）。
・1 人で 2 つ以上の講演の主たる説明者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
・さらに、シンポジウムの企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会・「みんなのジュニア生態学講座」

・日本生態学会は、生態学の社会への普及のため、アウトリーチ活動の一環として、高校生ポスター発表会･「みんなのジュニア生態学講座」を実施しています。
・高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
・第 67 回名古屋大会においても、高校生ポスター発表会に参加した高校生と若手研究者との交流会「みんなのジュニア生態学講座」を企画します。2 ～ 3 名の若手研究者に話題提供をお願いし、どのような中学・高校時代だったか、研究者を目指したきっかけは？等のエピソードも含めて、ご自身の研究を語ってもらいます。質問時間を十分に設けますので、ご期待ください。
・開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式 HP ／全国規模の ML 等で配信しますので、ぜひお知り合いの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしくお願いします。

英語口頭発表賞

・ESJ67 では、英語口頭発表枠で第 7 回英語口頭発表賞を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場をより多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。
・英語口頭発表に参加される方は、一般講演（口頭発表）を申し込む際に応募してください（※ 事前登録はなくなりました）。
・2020 年 3 月時点で博士取得後 5 年以内の方に応募資格があります。なお、この応募資格は、次回大会の ESJ68 から変更になる可能性があります。
・また、賞に該当しない「非若手研究者」の方の英語口頭発表枠での一般講演も歓迎します。ふるってご参加ください。

English Presentation Award

The English Presentation Award (EPA) aims to promote English presentations in the ESJ annual meetings and to give all participants more opportunities to share scientific ideas with international students and visiting researchers in Japan. At the same time, the EPA working group gives students and early career members an opportunity to gain experience in scientific communication, particularly experience that will be useful in international meetings. The EPA is open to students or early career researchers who have received a PhD within 5 years before March 2020. Please apply to EPA when ESJ67 registration and application for oral presentations is open (It is NOT necessary to contact us in advance). Please note that the eligibility may be revised in ESJ68. We are looking forward to your application for the English Presentation Award.

ポスター賞

ESJ67 では、若手の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、英語での説明を併記するなど、日本語を理解しない参加者への配慮を推奨します。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ 2020

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2020 が行われます（3 月 9 日（月）を予定)。主催はエコカップ 2020 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

第 66 回日本生態学会神戸大会（ESJ66）開催報告

土居秀幸（大会企画委員会　前委員長）

第 66 回日本生態学会大会（ESJ66）は、2019 年 3 月 15 日から 19 日までの 5 日間、神戸国際展示場・会議場にて開催されました。約 2800 名の参加があり、第 64 回の東京大会に次ぐ規模となりました。また、第 56 回盛岡大会以来、10 年連続で参加者が 2000 名を超えています。65 件の集会（シンポジウム･自由集会･フォーラム）と 1187 件の一般講演（口頭・ポスター）が行われ、高校生ポスターでは 81 件の発表がありました。様々な生物に及ぶ研究まで、フィールドから理論研究までと幅広い分野が一堂に会し大変魅力的な大会になったかと思います。会場の確保やアルバイトスタッフの管理、懇親会や公開講演会の運営､協賛企業や設営業者との対応など、神戸大会実行委員会の皆さんには多大なご貢献をいただきました。献身的に運営を支えて頂き、どうもありがとうございました。

神戸大会では、生態学会と分子生物学会との連携に基づき、分子生物学会員との共同でのシンポジウム・自由集会の企画、および講演が可能となりました。また、分子生物学会員については、自由集会においても招待による講演が可能としました。分子生物学会との共同企画のシンポジウムが 3 件開催されました。共同企画のシンポジウムでは、分子生物学会員との活発な議論が行われ、その取り組みは日経 BP 紙面で紹介されるなど大きな注目を集めました。

今大会での大会改革

神戸大会では、これまでの学会での議論を踏まえて、多岐にわたる改革がなされました。主な改革についてご紹介させていただきたいと思います。

1）大会のシステム改革

神戸大会では、大会のあり方について大きな改革がなされました。この改革は、私もメンバーであった「大会のあり方検討部会」で 3 年間をかけて検討され、総会第二部を経て、会員の皆さんからご意見を頂きながら決定に至ったものです。

主な改革としては、集会の様式の統廃合を行いました。シンポジウム（3 時間）と（新）自由集会（1.5 時間）の 2 つの集会形式として､企画集会を廃止いたしました。（新）自由集会は大会公式行事として、要旨が登録された発表については公式発表と認めることとしました。それに伴って、自由集会のみの有料聴講ができる自由集会聴講券を当日 1000 円で販売し、自由集会のみ期間を通じて聴講いただけるようにしました。

また、これまでのファイルアップロードによる口頭発表ファイルの事前登録を廃止しました。新たにスピーカーレディールームを設置し、当日 USB メモリによる持参によりファイルを登録していただく形にしました。神戸大会からの取り組みでしたが、特に現場に混乱もなく無事に口頭発表が行われました。次期大会以後もこちらの形式を踏襲して運営される予定です。

2）学会のバイリンガル化

これまでの大会においても、申し込みシステムや大会ホームページについては日英併記が行われてきました。神戸大会では、私も委員である将来計画委員会から提案されていた､大会講演情報のバイリンガル化を目指して、発表タイトル・講演者の日英併記を行いました。また、バイリンガル化されている発表（スライドやポスターが英語併記）については、それを明確にするバイリンガルマークを導入しました。

発表タイトル・講演者の日英併記に伴って、大会プログラム集については、基本的に全ての情報について日英併記としました。神戸大会のプログラム集ではこれまでの経緯や可読性に配慮して、日本語プログラムと英語プログラムを分ける表記としました。このことによりページ数を大幅に増大することになり、今後検討が必要なことと思います。大会の名札についても、国際的な生態学会の名札として刷新し、全ての参加者について氏名と所属の日英併記としました。

3）申し込みシステムの簡略化

神戸大会では、事前申し込みの多くを廃止し（ER シンポジウムだけは事前申し込みを残しました。）、締め切りを 10 月 31 日に一本化しました。また締め切り当日は 23:59 までとしました。ただし、問い合わせ対応は 17 時までとしました。また、学会の新規入会についても会費の納入を遅らせ､締め切り当日まで入会可能としました。これらの簡略化、また当日申し込みの利便性を高めたことで、より多くの方に発表・参加を申し込みいただけたのではないかと思っております。

プログラム集冊子については、引換券による当日受け取りとしました。これまでは会員全員に郵送させていただいておりましたので、不参加の方にはプログラム集が配布されずご不便をおかけいたしました。企画委員会での大会プログラム作成についても、送付作業がなくなったため、これまでより余裕を持って取り組むことができました。

上記の通り、神戸大会ではこれまでになく多くの改革がなされました。そのため、いくつかの問題点も生じてしまい、大会に参加された皆さんにはご不便をおかけしましたことお詫び申し上げます。

次期名古屋大会については、日野輝明大会会長、橋本

啓史大会実行委員長、内海俊介企画委員長のもと、すでに準備が進められています。次期大会では今回神戸大会での改革で生じた問題点について改善し、より魅力ある生態学会大会となるよう全力を尽くしていただいております。担当地区会で組織される実行委員会と常設の大会企画委員会が両輪となって運営しています。講演や各種集会の受け付け、賞の運営やプログラムの編成などを企画委員会の各部会が行う事によって、実行委員会の負担を軽減し、様々なノウハウを蓄積して安定した運営を行えるようになりました。しかしながら、新規の大会企画委員の確保など今後の安定した運営について問題点も多々あります。新規企画委員については、一部の部会では会員メールなどを通じた公募も進めており、今年度は定員を確保できる応募をいただきました。今後も学会員の皆様のご協力を賜り、より安定的な大会運営ができるように努めたいと考えております。

謝辞

最後になりましたが、今大会の運営にあたりお世話になった以下の方々に厚くお礼を申し上げます。

角野康郎大会会長、丑丸敦史大会実行委員長、三橋弘宗会大会実行副委員長をはじめとする神戸大会実行委員会の皆さま、各部会長（幸田良介運営部会長、吉田勝彦シンポジウム部会長、下野綾子発表編成部会長、近藤美由紀ポスター部会長、水澤玲子高校生ポスター部会長、黒川紘子英語口頭発表部会長）をはじめとする大会企画委員の皆さま、学会執行部、事務局の皆さま

学会各賞（宮地賞・大島賞・鈴木賞）受賞者に副賞を提供してくださったEdanz社、ランチョンフォーラムを開催いただき、英語口頭発表賞に副賞を提供してくださったシュプリンガー・ネイチャー社、鈴木受賞者に副賞を提供してくださったワイリー社（50音順）

審査員を務めて下さった皆さま（順不同、敬称略）

ポスター賞：青柳亮太、安部淳、阿部晴恵、雨谷教弘、飯田碧、池川雄亮、石井弓美子、石井潤、石田惣、石濱史子、井田秀行、市橋隆自、井手竜也、井出純哉、伊東宏樹、伊東康人、伊藤江利子、稲垣善之、今村彰生、入谷亮介、岩泉正和、卜部浩一、江成広斗、種田あずさ、大河原恭祐、太田真人、大西尚樹、小川みふゆ、奥崎穣、柿沼薫、金尾太輔、金谷弦、鎌倉真依、唐沢重考、北村俊平、木下こづえ、金城幸宏、久保麦野、熊谷直喜、小池伸介、幸田正典、古賀庸憲、小坂井千夏、小林慶子、小山明日香、才木真太朗、齋藤隆実、佐伯いく代、坂部綾香、坂本洋典、坂本佳子、佐鹿万里子、指村奈穂子、佐橋玄記、澤畠拓夫、塩尻かおり、島田直明、城野哲平、上村真由子、城川祐香、鈴木俊貴、関剛、曽我昌史、高科直、高田守、高野宏平、田辺力、田邊優貴子、谷友和、辻井悠希、辻本翔平、筒井優、堤田成政、鶴井香織、鄭峻介、寺田佐恵子、遠山弘法、徳地直子、土畑重人、富松裕、直江将司、中川さやか、仲澤剛史、中島祐一、永田尚志、中西正、中西康介、中野光議、永光輝義、長谷川匡弘、畑啓生、畑瀬英男、速水将人、原口岳、兵藤不二夫、平田晶子、平山貴美子、廣田峻、深谷肇一、福井眞、藤岡慧明、堀正和、本郷峻、本間淳、前野浩太郎、眞壁明子、益子美由希、松井淳、松井彰子、松村健太郎、松本一穂、松山周平、宮下彩奈、宮脇成生、村上雄秀、村林宏、目黒伸一、森山徹、安田仁奈、柳川亜季、山浦悠一、山口英美、山崎裕治、山科千里、山瀬敬太郎、山田勝雅、山本智子、吉田智弘、吉村真由美、吉山浩平、渡邊俊、他匿名希望9名

英語口頭発表賞：彦坂幸毅、村岡裕由、木庭啓介、小野田雄介、松浦健二、佐々木顕、小林和也、牧野能士、山道真人、小柳知代、内田圭、酒井章子、黒川紘子、鈴木紀之、宮竹貴久、安部淳、照井慧、内海俊介、岸田治、日室千尋、荒木仁志、鏡味麻衣子、小林真、片渕正紀、甲山隆司、荒木希和子、瀧本岳、齋藤星耕、小黒芳生、他匿名希望1名

高校生ポスター賞：饗庭正寛、木村進、髙須賀圭三、日野貴文、松尾奈緒子、松村俊和、安藤温子、伊藤真、横川昌史、菊地賢、金田哲、熊野了州、栗山武夫、廣瀬祐司、高木俊、高野宏平、黒江美紗子、三宅崇、山守瑠奈、山村靖夫、持田浩治、小林真、小林卓也、水澤玲子、西脇亜也、船本大智、大曽根陽子、大竹裕里恵、中井咲織、中田兼介、中濱直之、嶋田正和、東若菜、東出大志、馬場友希、畑田彩、平山大輔、片山直樹、北出理、遊佐陽一、櫻井麗賀、他匿名希望1名

神戸大会におけるキャリア支援専門委員会活動報告

キャリア支援専門委員会　木村　恵・上野裕介・宮下　直

キャリア支援専門委員会は、生態学分野の若手キャリアパス形成支援、人材育成と男女共同参画を推進するため、2010 年に発足した委員会である。現在、16 名の委員、9 名のオブザーバーが所属し、男女共同参画とキャリア支援の 2 つのグループを中心に活動を行っている。これまでにもキャリア支援専門委員会では、2019 年 1 月発行のニュースレター No.47 において、男女共同参画学協会連絡会シンポジウムや女子中高生を対象としたイベント（リコチャレ）への参加報告を行ってきた。

これら外部イベントへの参加は、委員会活動のほんの一部であり、毎年の日本生態学会全国大会においても、学会員に直接関係する活動を数多く行っている。一方で、少ない人数で多岐にわたる活動をボランティアで展開しているため、各委員の負担も限界に近づいている。そこで本稿では、今年 3 月の神戸大会でのキャリア支援専門委員会の活動紹介を通じ、活動への理解を深めていただくとともに、私たちの活動に参画・協力してくださる方を増やしたいとの想いをお伝えしたい。なお、これまでキャリア支援専門委員会が主体で設置･運営していた「託児室」および「ファミリー休憩室」は、昨年の札幌大会より、大会事業として実行委員と事務局に一任することとなったが、現在も設置方法や運営方法、利用状況等についての情報共有を常に行っていることから、併せて本稿で紹介したい。

◆大会における活動報告

1）フォーラムの開催

委員会では毎年、2 つのフォーラムを主催している。ひとつは、大学院生からポスドク、若手研究者に向けたキャリアパス支援に関するフォーラムであり、もう一つは、男女共同参画やワークライフバランスに関するフォーラムである。なお、育児中の会員でも参加しやすいよう、子ども連れでの参加も歓迎している。

神戸大会で開催したフォーラムは、以下の通りである。

まず 3 月 16 日に、キャリア支援フォーラム『その時どうした？人生の選択の裏側を聞いてみよう』を開催した。今回は、大学院生や若手・中堅研究者が今後直面する留学や転職、子育てなどのキャリア形成の 1 コマに焦点をあて、その裏側にあった決断やそこから得た気づきについての講演を 4 名の方にお願いをした。参加者は、49 名に上り、学生のみならず、若手や中堅研究者、学生指導の参考に参加した教員など、様々であった。特に、会場アンケートからは、「博士進学後の進路に不安があった」、「任期が迫っており、他の人のキャリアパスを知りたかった」、「将来が不安だった」、「海外での研究に興味がある」、「博士進学を迷っている」、「教員としてキャリア支援に貢献したい」など、多様なニーズがあることがわかった。

次に 3 月 18 日に、男女共同参画フォーラム『生態学会参加者の年齢・ジェンダーバランスの変化：―参加者の多様性評価を未来につなぐ―』を開催した。参加者は、様々な年代の参加者 16 名であった。全体討論の時間を長めに取ることで、講演内容に対する率直な意見や参加者が抱える様々な悩みなどを聞き、問題意識を共有することができた。なお、男女共同参画フォーラムの詳細については次項に詳しく記載したため、そちらを参照していただきたい。

これらフォーラムを通じて得られた意見は、委員会内外で共有しながら、今後の委員会活動に活かしていく予定である。

2）キャリア支援相談室・相談ブースの設置

委員会では、毎年、キャリア支援のための相談室やブースを設置している。上述のキャリア支援フォーラムの開催にあわせて、キャリアコンサルタントによる個別のキャリア相談窓口や、生態学的素養を備えた学生・大学院生・ポスドクの採用意向がある民間企業や官公庁、NPO 等の社員・職員による相談ブースを設置している。

神戸大会では、3 月 16 日 9:30 ～ 17:00 に、キャリア支援相談室として人材募集中の官公庁や企業各社による就職情報ブースを設置した。午前の部は、環境省と（一社）建設コンサルタント協会、午後の部は（株）グレイス、応用技術（株）がブースを設置し、大会参加者の相談に対応した。また終日、（一社）Sus-Pro のキャリアコンサルタントによる無料の就職・転職相談窓口を設置した。事前予約は不要とし、午前 40 人、午後 30 人の利用があった。なお、相談室の設置に関わる費用は、これまで学会からの補助を受けていたが、昨年度からは参加企業側が負担して、自立的に実施する体制に移行している。

またこの活動は、土木や建設、官公庁など、異業種の人事担当者等にも、生態学会員の活動とポテンシャルの高さに気づいてもらうきっかけになっており、実際に就職につながったという話を聞く機会も増えてきた。

なお、相談員の派遣や参加企業の募集に当たっては、次代を担うサステイナブルビジネスやサステイナビリティ人材の支援を行う（一社）Sus-Pro から、営業活動と社会貢献活動の一環として無償で協力を受けている。このように学会からの資金提供を受けない状態で運営しているため、先方の都合で現在の体制が継続できなくなる可能性もある。これら相談室・ブースの設置や立会い、片付けは、参加企業と委員会メンバーが行っている。

3）民間企業や官公庁、NPO 等のパンフレットの配架

生態学的素養を備えた学生・大学院生・ポスドクの採

用意向がある民間企業や官公庁、NPO 等の人材募集に関するパンフレットを、大会会場内のキャリア支援相談室前およびポスター会場に配架し、大会参加者が自由に持ち帰れるようにした。パンフレットの配布を希望する事業者の募集は、委員会メンバーからの紹介、キャリア支援相談室に出展した（一社）Sus-Pro、（株）グレイス、（一社）建設コンサルタント協会などからの紹介、Jeconet などのメーリングリスト経由での募集告知などの方法を併用し、広く事業者を募った。パンフレットは事前送付式とし、配布希望の事業者数は 29 社であった。なお配布希望の事業者数は、年を追うごとに増加している。

これらパンフレットの配架や片付けはキャリア支援委員会が、実行委員会の協力のもとに行っている。しかし会場の利用可能時間等の制約もあり、それら配架・撤去の時間帯が口頭発表やシンポジウムに重なるなど、各委員の個人的負担になっている。

4）託児室およびファミリー休憩室の設置

育児中の会員も家族に気兼ねなく参加できる大会を目指し、託児室およびファミリー休憩室の設置を大会実行委員、事務局にお願いしている。託児室の利用料は 1 時間あたり 600 円とし、実費の差額分を学会で補填している。今大会では、託児室の利用者数が 16.8 人 / 日、ファミリー休憩室の利用家族数が 5 家族 / 日といずれも過去最多であった（http://www.esj.ne.jp/careersupport/hp/crrsprt_index.html）。利用者の増加は、こうしたサポートが学会に根づいており、ライフイベントを迎えた会員も学会参加を断念することなく選択できる状況を反映していると思われる。その一方で運営担当者の負担も増加しており、これを軽減してくことが喫緊の課題である。委員会では、他学会での試みや過去の事例などの情報を担当者に提供することで、引き続き負担軽減につながるサポートを行っていきたい。また、利用者の方々には今後も利用時のルール順守をお願いする次第である。

5）こども生態学講座の開催

学童以上の託児と生態学の普及を目指し、本大会では大阪市立自然史博物館、NPO 法人大阪自然史センターと共同でこども生態学講座を開催した。このような催しはアメリカ生態学会などでも行われており、今回は東京大会で行われた試みを参考に再検討した構成で開催した。具体的な内容は以下の通りである。

「はくぶつかんたんけん in 大阪市立自然史博物館」
内容：学芸員によるバックヤードツアーおよびクジラに関するワークショップ
日時：2019 年 3 月 17 日（日）8:30 ～ 16:00
対象：生態学会神戸大会参加者とその家族（小学生以上。未就学児童は保護者と参加）
参加費：1 人 5000 円、付き添いは 2000 円（託児と同程度額を徴収し、実費差額は委員会の活動費より補填）

定員 20 名の募集に 9 名（内保護者 2 名）が参加した。アンケートによる参加者の回答、当日の様子から、内容は大変好評であり、次回以降も継続が望む声が大きかった。今回はアナウンスが遅れたことから、今後は周知を徹底するとともに、アンケートの結果を参考に内容やスケジュールを検討し、次年度も開催する予定である。

6）懇親会におけるこども料金の設定と託児室の案内

子ども連れでも気兼ねなく懇親会に参加できるよう、神戸大会では子ども料金の設定と告知について理事会を通して依頼し、実現した（未就学児 無料、小中学生 1,000 円、高校生・学部学生 4,000 円）。また、実行委員会の配慮により、懇親会時に利用可能な託児施設の紹介もあり、様々なスタイルを選択できるようになった。

◆おわりに

このようにキャリア支援専門委員会では、様々な取り組みを実施しており、その中でも託児室やキャリア支援相談室のような実践的な取り組みは、学会大会に根づき、当事者たちにとって不可欠なものとなっている。まずは、これまでの取り組みを立ち上げ、長年継続してきた先輩方のご尽力に、この場を借りてお礼を申し上げたい。

一方で現在の取り組みの中には、まだまだ改善されるべき点がある。

まず、実際に携わっているキャリア支援専門委員や大会実行委員は、専門の知識や技術を持った人々ではなく、皆さんと同じ生態学会員である。様々な業務や研究の傍ら、ボランティアでこれらの活動を行っていることをご理解いただきたい。

次に、利用者ならびに諸先輩方へお願いしたいことがある。本稿で取り挙げた様々な活動があることを知ってもらい、各場面でささやかなご協力を頂きたい。例えば、生態学会や Jeconet に入会していない学部生などに、キャリア支援フォーラムやキャリア相談室の情報を届けるようなご協力を頂きたい（神戸大会でも半数以上の利用者が「大会会場で知った」と回答）。また託児室や相談室の利用にあたっても、その担い手がボランティアの生態学会員であることを知っていただき、担い手のスタッフの負担軽減と、多くの学会員が気持ちよく利用できる環境づくりや利用マナーの保持に、ご協力をお願いしたい。

最後に、こうした活動は私たちの代で終わらせるのではなく、今後も継続してくことが、当事者にとっても、学会大会に多様な人材を呼び込み続けるためにも重要と考える。これまでこうしたサポートを利用された方には、ぜひ「今後サポートが必要となる会員」のために、将来少しでも力を貸していただければと思う。

本稿や本委員会活動が、多様な人材が参加し活躍できる「日本生態学会全国大会」の維持・発展の一助になれば幸いである。

キャリア支援専門委員会 2019 年男女共同参画フォーラム開催報告

キャリア支援専門委員会　小山耕平，鈴木智之，水野晃子，小柳知代，河内香織，曽我昌史，
三宅恵子，木村　恵，可知直毅，宮下　直

キャリア支援専門委員会は、日本生態学会第 66 回全国大会（神戸大会）において、男女共同参画フォーラム「生態学会参加者の年齢・ジェンダーバランスの変化：参加者の多様性評価を未来につなぐ」を開催した（3 月 18 日）。参加者は発表者を含め 16 名であった。まず、趣旨説明を行い、男女共同参画学協会連絡会（以下、連絡会）シンポジウムの参加報告を行った。大会期間中に設置されているファミリー休憩室が参加者から好評だったことや、連絡会のシンポジウムで取り上げられた「無意識のバイアス（誰もが潜在的に持っている自覚できない偏見）」（男女共同参画学協会連絡（2017）「無意識のバイアス -Unconscious Bias- を知っていますか？ https://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2019/UnconsciousBias_leaflet.pdf」）等の話題が紹介された。さらに、従来のワークライフバランスの考え方のようにワークとライフを区別するのではなく、両者を融合的に捉える「ワークライフフュージョン」の概念（仕事場に子供と一緒に出勤して、仕事をしている傍で子どもが遊んでいられるような職場など）についても紹介された。続いて、生態学会の会員・大会参加者の属性調査および連絡会の大規模アンケートの解析結果の紹介と総合討論が行われた。以下、その概要を報告する。なお、現在、委員会では最終報告に向けてより詳細な解析を行っており、本稿に記した数値が多少変化することに留意されたい。

◆生態学会のジェンダーバランスの現状

生態学会の女性会員比率は約 24％（2017 年）、概ね女 1：男 3 で、同規模の学会の中でも高い値を示している。女性会員の比率はこれまで増加傾向であったが、近年は頭打ちになってきている。大会参加者（2012 年大津および 2017 年東京）の属性調査の結果、参加者（発表有無は不問）の女性比率は年齢階級別で 20-24 歳（40％）から 25-29 歳（30％）にかけて急激に低下し、その後も漸減していた。学生参加者の女性比率が高い（38％）のに一般参加者の比率が 18.4％であることから、大学卒業と同時に生態学会大会への参加が減少することを反映している可能性がある。一般講演者の比率も同様であった。

更に、リーダーシップ活動の指標としてのシンポジウム等（企画・自由集会、フォーラムを含む）に着目すると、属性調査結果の女性比率は講演者の 15％、企画者の 13％（10 名）と一般講演者における女性比率に比べて企画者は比率が低いことが分かった。ただし、このアンケートでは、発表形態を一つしか選択できなかったこと、また企画者としての立場が決定する前に解答した場合がありうるために、実際の企画者数を正確に反映していない可能性が考えられた。そこで、発表要旨で実際の数を調べた結果、女性比率はシンポジウム等講演者の 17％、企画者全体の 20％、筆頭企画者の 16％、その他企画者の 24％であった。アンケートにおいて男性企画者は約半数が企画者と回答していたが、女性企画者 30 名のうち 10 名のみが企画者と回答していることがわかった。

続いて、男女共同参画学協会連絡会（以下、連絡会）が 2007 ～ 2016 年に科学技術系の学会員を対象に行った「科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」（通称、大規模アンケート）の結果の推移を紹介した。回答者の女性比率（2016 年）は 28％（連絡会構成員の比率は 24％）、各自が望む将来像（現時点でその職にある人の継続希望者も含む）は、男女共に 75％以上が「大学・研究機関等での研究職」であり、2007 年では「大学・研究機関等で研究室を主宰」が男性の 36.5％、女性の 16.9％であったが、2016 年には男性の 33％、女性の 24％と、男女差が小さくなってきている。「大学・研究機関等で執行部に参加」と答えた割合は、2012 年では男性の 1.5％（10 名）、女性の 0.8％（2 名）であったが、2016 年では男性の 2.7％（17 名）、女性の 3.2％（11 名）と増加した。（以上は、第一回～第四回 科学技術系専門職の男女共同参画実態調査」男女共同参画学協会連絡会（2008; 2013; 2017）による。）

◆全体討論

シンポジウム等に関わる参加者の女性比率の結果について、会場からは、「結婚・出産を機会に学会参加のブランクが生じて、それをきっかけに企画者になりたいと思うことがあまり無くなった。同世代の男性の活躍と比較して自信が無くなる。」、「（分野によっては）シンポジウムの企画は男性が行う雰囲気もあり、企画しようと思えない」、「子供の突然の病気などに対応しやすいポスター発表を選んだ」などの意見が出た。こうした背景には「社会的に『女性が育児をする』という無意識バイアスがある」ことが指摘され、「男性が早く家に帰れるよう制度化すれば、女性も男性と同等に仕事時間を確保できるようになるのではないか」という意見も出た。実際に「民間企業に比べて大学等の教育機関ではライフイベントに対するサポートが立ち遅れていると感じること」や「女性スタッフが少ないため、少数の女性に業務が集中する」など、「子供を産むという選択が研究を続けるうえで不利になりがち」であり、女性が研究を続ける難しさが指摘された。「指導教員が女子学生に（研究職ではなく）公務員を勧める傾向がある。指導教員側の意識を変える必要がある。」という声はこうした状況を反映しているからかもしれない。今回指摘された年齢やジェンダーバランスの偏りを解消し、多様な人材を育成していくには「受賞やシンポジウムの企画などの成功体験を通

して、女性や若手をエンカレッジしていく」重要性が指摘された。他学会で実施されている『女性研究者奨励賞』のような賞の創設についても議論されたが、賛成の意見がある一方、女性に限定することについては、「マイノリティ意識を反映してしまう」「若い人の成功体験を育てるということ自体が大切だから、女性に限定する必要はない。」等の否定的な意見も挙げられた。また、「『女性研究者育成功労賞』のように女性研究者を輩出した研究室主宰者への賞の創設」など興味深い提案もなされた。

本フォーラムで、学会員の年齢・ジェンダーバランスに関する課題の背景となる多くの問題点の存在が指摘された。今後、年齢、性別の多様な委員会メンバーで議論を重ねながら、背景となる具体的なひとつひとつの小さな問題から目を向け、解決を目指していきたい。

記　事

Ⅰ．一般社団法人日本生態学会 2019（平成 31）年度定時総会（第 66 回大会会員総会、2019 年 3 月 18 日、代議員 15 名・委任状提出代議員 5 名・会員約 70 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A.　報告事項

1.　事務局報告

a.　2018 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 68 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	2160	2240	2200
配本部数	2160	2132	2162
残部数	0	108	38

保全生態学研究 23 巻

	1 号	2 号
発行部数	1200	1275
配本部数	1168	1155
残部数	32	120

Ecological Research Vol.33

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	112	112	112	112	112	112
配本部数	110	111	107	106	106	109
残部数	2	1	5	6	6	3

会員数

	2017 年 12 月末現在			2018 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	243	137	380	248	148	396
東北	170	105	275	172	97	269
関東	994	368	1362	992	374	1366
中部	393	143	536	381	151	532
近畿	469	302	771	466	302	768
中四国	187	66	253	185	59	244
九州	222	75	297	223	86	309
外国	35	24	59	43	36	79
小計	2713	1220	3933	2710	1253	3963
賛助			85			78
名誉			3			4
小計			88			82
合計			4021			4045

会費納入率（各年 12 月末現在）

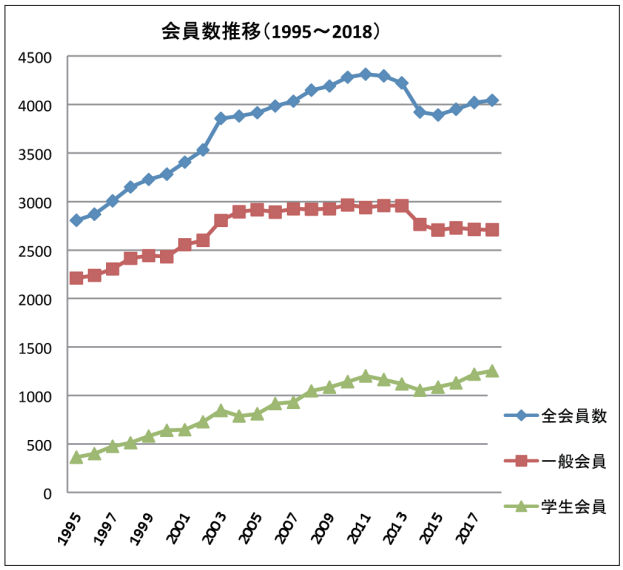
	2017 年		2018 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	93.0	75.2	94.4	75.7
東北	90.6	75.2	94.2	67.0
関東	93.4	73.9	92.2	69.3
中部	92.6	82.9	93.4	68.2
近畿	94.5	80.4	94.0	73.8
中四国	94.1	66.2	95.7	66.1
九州	93.2	75.4	94.6	70.9
海外	88.6	59.3	83.7	66.7
全体	93.2	74.6	93.3	70.7

雑誌不要者数変遷（各年 12 月末）

年	一般					学生				
	会員数	生態誌不要		ER 不要		会員数	生態誌不要		ER 不要	
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2765	614	22%	789	29%	1054	495	47%	528	50%
2015	2707	623	23%	811	30%	1069	522	49%	563	53%
2016	2729	726	27%	952	35%	1130	716	63%	633	56%
2017	2713	830	31%	1054	39%	1220	783	64%	844	69%
2018	2710	964	36%	2698	99.6%	1253	896	72%	1253	100%
2019	2605	956	37%	2586	99.3%	1298	1017	78%	1292	99.5%

1月現在

※2013 年までは AB 会員数



b.　庶務報告（2018 年 4 月～ 2019 年 3 月）

1. 日本学術振興会より平成 30 年度科研費（公開講演会）について内定通知があった。交付額は 1,400,000 円（4 月 1 日）
2. 日本学術振興会より平成 30 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H30 年度より 5 年間交付、H30 年度 14,000,000 円）（4 月 1 日）
3. 日本学術振興会賞への生態学会員 1 名の推薦・申請を行った（4 月 6 日）
4. 学会サーバーの移転作業を行った（4 月 9 日～ 13 日）
5. 事務局倉庫整理を行い機密書類 160 kg、冊子等 2220 kgを処理した（4 月 10 日）
6. 日本学術振興会へ平成 29 年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4 月 11 日）
7. 日本生態学会へ平成 29 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（4 月 13 日）
8. 第 8 回 EAFES 国際会議が名古屋大学東山キャンパスで行われた（4 月 21 日～ 23 日）

9. 法務局に 2018（平成 30）年定時総会にて就任した理事・監事交代を申請し登記された（4 月 23 日）
10. 学会員および保全誌定期購読者対象に「保全生態学研究誌の購読方法に関するアンケート」を実施した（6 月 18 日～ 7 月 6 日）
11. メール審議により 2019 年からの学生会費値下げが総会にて承認された（8 月 27 日）
12. 7 月中国地方豪雨、8 月・9 月台風 20 号・21 号被害、9 月北海道胆振東部地震について会員へ被害情報収集依頼の一斉メールを配信し 1 件の回答があった（9 月 7 日配信）
13. 自然史学会連合「博物館資料保全のための緊急声明」賛同について、理事会メール審議にて承認された（9 月 27 日）
14. 男女共同参画学協会連絡会「大学入試男女機会均等に関する声明文」賛同について、理事会メール審議にて承認された（10 月 30 日）
15. 学術振興会に平成 31 年度科研費（研究成果公開発表）計画調書など応募書類一式を送付した。（11 月 7 日）
16. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が理事会メール審議にて承認された（11 月 28 日）
17. 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構から依頼があり、国立大学教育研究評価専門委員および機関別認証評価専門委員の候補者として生態学会より 10 名推薦した（1 月 4 日）
18. 理事会より推薦された日本生態学会功労賞候補者 2 名（竹中明夫氏・高田壮則氏）が代議員に承認され受賞決定となった（1 月 8 日）
他、各種集会への後援・協賛名義使用承認 7 件、論文図表の転載許可 6 件

c. 会計報告（2018 年 4 月～ 2019 年 3 月）

1. 2018 年 1・2 号分の出版費としてシュプリンガーに 2,401,200 円を支払った（3 月 28 日）
2. ESJ65 懇親会費用として京王プラザホテル札幌に 3,300,000 円を支払った（3 月 28 日）
3. ESJ65 施設使用料・機器利用料・諸費用として札幌コンベンションセンターに 2,965,032 円を支払った（5 月 21 日）
4. ESJ65 大会関連委託費として国際文献社に 7,128,460 円を支払った（5 月 22 日）
5. ESJ68 施設利用料として岡山国際交流センターに 1,080,000 円を支払った（5 月 31 日）
6. 新サーバー移行作業費用として（株）MIERUME に 432,000 円を支払った（6 月 5 日）
7. 会員管理委託費 4 ～ 6 月分として国際文献社に 3,073,951 円を支払った（7 月 18 日）
8. 科研費（国際情報発信力強化）前期分として 8,000,000 円の入金があった（7 月 10 日）
9. 科研費（研究成果公開）として 1,400,000 円の入金があった（7 月 10 日）
10. 国際文献社へ会員管理委託費 4 ～ 6 月 3,030,903 円を支払った（7 月 20 日）
11. EAFES8 より残金として 2,230,642 円の入金があった（8 月 1-4 日）
12. 東京化学同人より「生態学入門 2 版」印税として 510,720 円が振り込まれた（8 月 24 日）
13. 土倉事務所へ日本生態学会誌 68-1 印刷費として 886,464 円を支払った（10 月 19 日）
14. 土倉事務所へ日本生態学会誌 68-2 印刷費として 819,882 円を支払った（10 月 19 日）
15. 土倉事務所へ保全生態学研究 23-1 印刷費として 1,264,896 円を支払った（10 月 19 日）
16. 土倉事務所へニュースレター No.45 編集費として 162,540 円を支払った（10 月 19 日）
17. 土倉事務所へニュースレター No.46 編集費として 72,036 円を支払った（10 月 19 日）
18. 科研費（国際情報発信力強化）後期分として 6,000,000 円の入金があった（10 月 30 日）
19. ワイリー社へ Plant Species Biology Vol.33 No.3 編集委託費として 750,000 円を支払った（11 月 14 日）
20. 国際文献社へ会員管理委託費 7 ～ 9 月 309,237 円を支払った（11 月 14 日）
21. ワイリー社へ Plant Species Biology Vol.33 No.4 出版委託費として 750,000 円を支払った（12 月 18 日）
22. 共立出版より「現代の生態学 5 行動生態学」の印税として 154,224 円が振り込まれた（12 月 18 日）
23. Springer 社へ Ecological Research Vol.33 No.3-6 出版委託費として 4,847,760 円を支払った（12 月 21 日）
24. 土倉事務所へ日本生態学会誌 68-3 印刷費として 1,211,760 円を支払った（1 月 30 日）
25. 土倉事務所へ保全生態学研究 23-2 印刷費として 993,870 円を支払った（1 月 30 日）
26. 国際文献社へ会員管理委託 H30 年 10-12 月経常費用 1,072,048 円を支払った（1 月 31 日）
27. 2018 年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。（2 月 8 日）
28. 2018 年法人税として 353,300 円を納税した（2 月 13 日）

2. 大会企画委員会

○一般講演・各種集会開催状況

回	開催地	ポスター	口頭	一般講演合計	高校生ポスター	シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	集会合計
59	大津*	1130	277	1467	35	26	5	20	32	83
60	静岡	894	211	1105	26	13	6	17	36	72
61	広島	944	214	1158	55	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	29	12	11	19	29	71
63	仙台	949	243	1192	40	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899	216	1115	45	19	7	17	29	72
66	神戸	918#	269#	1187	81	21+	12	-	32	65

* EAFES 合同　# うちポスター賞応募 512 件　# うち英語賞応募 56 件　+ うち分子生物学会との共同企画 3

○準備スケジュール
・概ね例年通りのスケジュールで進行した。

○今大会での改善点
・申し込み、プログラムの完全日英併記化
・申し込み締め切りの一本化
・集会系の統合、企画集会を廃止し、（新）自由集会 90 分に一本化
・自由集会聴講券（大会通じて聞けて 1000 円）を導入
・生態学会会費を当日までに支払えばよいとした。
・申し込みシステムを当日 23:59 までの稼働とした（問い合わせは 17 時まで）。
・口頭発表ファイルのアップロードに代わって、スピーカーレディールームの設置
・分子生物学会との連携による共同企画の受付（シンポ：3 件）

○廃止事項など
・シンポジウムの事前申し込みを廃止、ER 招待シンポジウムについては 8 月 31 日締め切りで事前申し込みを設置
・英語口頭発表賞の事前申し込みの廃止
・口頭発表事前登録の廃止
・プログラム事前配送の廃止

○今大会でのトラブル・課題
・高校生ポスター参加者について、委託先である国際文献社による名札の配送ミスがあり、多くの名札が別の学校に届いてしまった。学会からの謝罪文を受付時に渡すとともに、会長から謝罪いただいた。
・シンポジウム・企画集会の申し込みプロセスの複雑さによるトラブルがあった。講演者を最初に入れておかないといけないことなどがあった。
・フォーラムについて、自由集会と同じく時間が 90 分であることを連絡していなかったので、クレームがあった。
・17:00 で問い合わせを締め切ったため、1 件翌日にシステムトラブルで申し込めなかったという問い合わせがあった。
・プログラムの完全日英併記化によって、プログラムのページ数が増大した。

○その他申し送り事項
・分子生物学会との連携は、次回名古屋大会まで。それ以後継続されない場合はシステムを改定する必要がある（岡山大会）。

（文責：土居秀幸）

3. Ecological Research 刊行協議会

日　時：2019 年 3 月 15 日（金）13:15 ～ 15:15
場　所：神戸国際会議場　Room F（501）
出席者：仲岡雅裕（編集長）、陶山佳久（副編集長）、久米篤（出版担当理事）、飯島勇人、鏡味麻衣子、小林真、玉木一郎、伴修平、（以上編集幹事）、稲垣善之、大澤剛士、大塚俊之、岡部貴美子、工藤岳、小林和也、中澤剛史、中路達郎、西村欣也、兵藤不二夫、松井一彰（以上 編集委員）、岡田慶一（Copy Editor）、奥崎穣（Managing Editor）、荒生由香里、井上敦子（ワイリー・ジャパン）、青島裕子、中村祥子（Editorial Coordinator）

1. 事務局報告

・編集状況について
2018 年の編集状況について仲岡編集長より報告がされた。
・昨年は 5 月ごろから投稿数が減少したが、これは中国からの投稿が減ったためである。特に質の低い論文数が減少しているため、大きな問題ではないと考えているが、今年も投稿数は引き続き少ない状況にあるため、注意してプロモーションしていく必要がある
・アクセプト率は質の低い投稿の減少に伴い、30％台に上昇した
・投稿元は変化の傾向がみられ、中国、日本、アメリカは減少傾向、ポーランド等東欧が増加し、国際化がすすんでいる
・アクセプトされた国別リストでは例年通り日本、中国が上位となった。日本からは 7，8 割がアクセプトされている
・昨年の投稿数は、特集号の効果で後半の号で増加した
・Turnaround time は出版社移行等に伴いこれまでより長い傾向があった
・Review 引き受けについては国により差があり、日本は高く（7 割）、アメリカ 3 － 4 割、中国は 5 割ほどだった
・Reviewer への配分は均等化している（良い傾向）

・編集委員の交代について
仲岡編集長より、編集委員交代の報告がされた
・任期満了の AEIC（原則 4 年）5 名のご退任（三木編集幹事、富松編集幹事、山浦編集幹事、小野田編集幹事、露崎編集幹事）が報告された。
・新任 AEIC として、小林編集幹事、飯島編集幹事、Ma 編集幹事、長田編集幹事、瀧本編集幹事が紹介された
・新任の編集委員として深澤編集委員、今井編集委員、佐々木編集委員が紹介された
・編集部の配置換えについても報告がなされた

・出版社報告（ワイリー荒生様より）
Wiley の荒生様から出版社報告をいただいた。
・Vol 34(1) は 1 月 30 日に出版となった
・Vol 34(2) は近日中に出版予定である
・ポータルサイト
ESJ のポータルサイトとして 3 月上旬に始動した。サイトの掲載事項、リンク等についての報告がなされた
・出版社報告について、2017 の PSB のレポートが紹介された
・マーケティング

マーケティング担当の井上様より 3 誌共通のプロモーション案について紹介があった
・Ecology and Evolution への Transfer についての紹介
・今学会での出展についての紹介
・仲岡編集長よりプロモーションに関するアイディアの呼びかけがなされた

2. Ecological Research Award vol. 33（2018）受賞論文について
・仲岡編集長より、33 巻から 6 報の論文が 2018 年の ER アワードに選ばれた旨が報告され、各論文の内容、ダウンロード数等の紹介があった
・受賞論文は生態学会負担で OA 化（30 万）することが報告された
・久米編集担当理事、仲岡編集長より、プレスリリースの有効性が報告され、ニュースバリューがある論文の推薦がよびかけられた
・アワード審査過程の説明と、公正な審査のための協力が呼びかけられた

3. 特集企画について
・1 号出版済みの特集号、今後の予定の 3 つの特集号の内容と掲載予定が紹介がされた
・うち 2 つは ER フォーラムからの特集号、久保田先生特集は持ち込み企画である
・今後の特集の企画について、編集長より提案の呼びかけがあった
・今後の特集号出版について、プロモーション方法の提案の呼びかけがなされ、編集委員よりテーマの公募等、ポータルサイトでの積極的発信が提案された
・今後の特集について、編集部内では今生態学会の自由集会（Data Paper）からの特集号の案があることが報告された

4. 出版社移行および 3 英文誌合同出版について
・Transfer について
・3 誌連携に伴い、ER から PSB への Transfer があった（今回は Reject but transfer）ことが報告された
Ecology and Evolution への流れもできていることが周知された
・GTOC（Graphical Table of Contents）について
・Wiley の目次ページでの論文紹介コンテンツ（宣伝）である GTOC について、仲岡編集長より説明がされた
・掲載コンテンツの内容について、議論がなされ、権利関係の確認のもと、論文外の図や Infographics の掲載も可能であることが合意された
・GTOC についてはソーシャルメディアでの宣伝効果があるが、あくまで著者による宣伝であることに注意が必要であることが合意された

5. その他
・論文査読過程および公開時の Handling Editor の記名、および通知体制について
・編集委員の名前の公開について、著者宛ての Decision メールと、掲載論文における方針が議論された
・アクセプトの際は編集委員名をメール署名することが決定した
・論文公開に伴う編集者名公開については、編集委員全員宛てにメールにて諮ることとなった
・編集委員への Review 提出通知
・現在、編集委員宛てに一人目の査読提出の通知は送られていない。この点について、通知を送ることによるメリット等が議論され、通知することが合意された
・編集幹事のための編集委員リストについて
・編集幹事が編集委員を指名する際、適切な分野の編集委員を均等な負担で割り当てる方法について議論され、編集部より編集委員の分野リスト案が提案された
・上記分野リストは近日中にシステムからアクセス可能な設定にする予定である
・実働可能な編集委員については、編集部にて精査していく方針が確認された
・不正投稿論文について
・昨年の投稿論文についての不正報告があった
共著者詐称の不正、査読者の詐称疑惑のあった件、サラミ出版等が報告され、編集部にて倫理規定にのっとり対応し、執行部報告がなされ、執行部から適切な対応がされたことが報告された
・仲岡編集長より、不正が疑われた場合は編集部に連絡いただくようよびかけがあった
・Ecological Research 誌の扱う研究分野の拡大について
・生態系サービスの価値等人文社会学の投稿について、ER ではこれまで Out of scope 扱いだったが、今後受け入れの方向で検討することが仲岡編集長より報告された
・上記は 3 誌 ER フォーラムでも議論予定である
・編集委員の増員について（現人員が薄い分野、水域など）
・編集幹事からの要望を受け、数名増員の予定であることが仲岡編集長より説明された
・ジェンダーバランスへの考慮、海外 HE 増員が必要であるが、随時推薦を受け付ける旨周知された
・関連情報として、以下 ER フォーラムとシステム相談コーナーの紹介がされた
・ER フォーラム：「U 12　3 誌合同出版による日本発生態学のさらなる発信に向けて」
3 月 18 日（月）16:45–17:45 Room A
・投稿システムよろず相談コーナー：ワイリーブースにて
3 月 16 日（土）9:30–11:30 / 15:00-17:00
3 月 17 日（日）9:00–11:00 / 15:30-17:30
3 月 19 日（火）9:30–11:30
※Editorial Coordinator が、日頃の S1M 操作でのご質問、お悩みに対応いたします。

（文責：仲岡雅裕）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日　時：2019 年 3 月 15 日　10:30 ～ 11:10
場　所：神戸国際会議場　3 階 303 会議室

出席者：8 名＋オブザーバー（事務局・学会）2 名

a. 投稿、審査状況（2019 年 3 月 13 日現在）

	原著受付	総説受付	原著･総説			特集受付	特集		学術情報	学術情報特集	意見	連載
			受理	却下	審査中		受理	審査中				
2019	2	1	0	0	3	0	0	0	0	0	1	2
2018	2	2	2	2	0	2（12 編）	1（6 編）	1	1	1（6 編）	0	7
2017	3	8	6	5	0	1（7 編）	1（7 編）	0	2	0	1	4

b. 刊行状況

69 巻（2019 年）刊行状況

	原著	総説	特集	学術情報	学術情報特集	連載	その他・記事	合計	頁数
1 号	0	1	0	0	1（6 編）	2	2	11	
計	0	1	0	0	1（6 編）	2	2	11	

68 巻（2018 年）刊行状況

	原著	総説	特集	学術情報	学術情報特集	連載	その他・記事	合計	頁数
1 号	1	1	0	1	0	2	2	7	80
2 号	0	3	0	0	0	1	0	4	66
3 号	0	1	1（7 編）	0	0	3	0	11	111
計	1	5	1（7 編）	1	0	6	2	22	257

c. その他

・投稿原稿のプレプリント公表について
・編集手続きの改善について

（文責：伊東明）

5. 保全生態学研究刊行協議会

日　時：2019 年 3 月 15 日（金）13:15-15:15
場　所：神戸国際会議場　Room E（403）
参加者数：11 名、北村（執行部）、橋口（事務局）

a. 報告事項

報告事項：
＜刊行状況＞
1. 刊行状況の報告
＜読者サービス＞
2. 2018 年夏の電子化に関するアンケート報告
＜投稿者サービス＞
3. Editorial Manager 投稿時の登録情報の簡略化
EM からの査読依頼メールなどで利用されないランニングタイトル、表題（英文）、抄録（英文）、キーワード（和英両方）は、本文のみとして重複入力を省略したい
4. 投稿時のアップロードファイルの簡略化
図や表（Excel）を別ファイルとしてアップロードするのを標準としていたが、Word の本文に表や図も入れ込んでひとつのファイルとして作成しても可とする方向
5. 付録（印刷や PDF、ダウンロードファイル）の取り扱いの充実
6. プレプリントのとりあつかいについて
7. 投稿者の満足度アンケートを行うか。投稿アップロード、審査過程、印刷・校正過程、メディアとして望むこと、など
＜審査過程＞
8. 記事カテゴリーと査読方針

b. 審議事項

9. 投稿規定の改訂

（文責：小池文人）

6. 自然保護専門委員会

日　時：2019 年 3 月 15 日（金）13:15-15:15
場　所：神戸国際会議場　Room I（504+505）
出席委員：21 名：露崎、紺野、星崎、亘、和田、野間、中井、伊谷、増澤、竹門、加藤、横畑、阿部、吉田、常田、矢原、村上、角野、神山、大久保（新委員）、須賀
オブザーバー：可知理事（自然保護担当）

審議事項

1. 2018 年度活動費支出報告及び 2019 年度活動費支出予算（案）について
須賀委員より報告及び説明があり、原案の通り認められた。
2. 辺野古・大浦湾のサンゴ礁生態系保全にかかわる合同要望書の経緯について
吉田委員長より、本年 1 月 29 日より 2 月 20 日までに至る合同要望書作成にまつわる経緯について説明がなされた。本件の反省点として、自然保護関連の要望書の提出は、学会の対外的な意見表明であり、執行事項と見なされるが、1）執行部への説明がないままに、他の学会への合同要望書提出の依頼を行ったこと、2）自然保護専門委員会内の審議は一週間のメール審議のみであり十分な審議が行われたとは説明できないこと、3）地区会、地区選出の自然保護専門委員への説明もメールのみであり十分な了解を得たとは言えないことなどが問題であった。本件の反省点に基づき、今後の要望書等の提出の際のプロセスの検討を行った。
3. 今回の要望書の反省とそれに立った今後の要望書の取扱について
吉田委員長より、要望書等の提出に際しての検討事項案が提示された。それに基づき、種々意見交換が行われ、次のことを確認した。1）規則に沿って手続きを進めなければならないが、緊急性の高い案件については会長にまず相談して要望書提出の判断を仰ぐ。その後、理事会・総会での承認または追認について確認する。2）メール審議を行う場合は、議事録を残す。3）メール審議だけでは取り纏めが困難な案件については、専門委員会執行部だけでも会議を行い、要望書に改定を重ねる。4）今回の件については、緊急性の高い案件であることから、以上のことを踏まえ、自然保護専門委員会名での要望書提出を目指す。
4. 白保サンゴ礁リゾートホテル問題に関する相談の取扱いについて
吉田委員長より説明があり、種々意見交換を行った。
5. 外来種検討作業部会部会長の交代について

村上委員から提案がなされ、現作業部会長の村上委員から五箇公一氏への交代が承認された。それに伴い、五箇氏を新たに当委員会に追加することについて、理事会に提案することが確認された。

6. 要望書・意見書等に向けた他の取組について
現時点では特にないことを確認した。

7. 次期役員改選の進め方について
吉田委員長より説明及び提案があり、今後検討していくことが承認された。

8. その他
特になし。

報告事項

1. 自然保護専門委員会活動報告（2018 年度）
須賀委員より、自然保護専門委員会内規の改定（2018/7/21）及び理事会での承認及び施行（2018/7/22）について報告がなされた。また、「奄美大島嘉徳海岸の護岸建設の見直しを求める要望書」（日本生態学会 自然保護専門委員会、日本ベントス学会 自然環境保全委員会、日本魚類学会 自然保護委員会による合同要望書）の提案・作成・提出（2018/9/3 鹿児島県知事・鹿児島県議会議長宛）について報告がなされた。さらに、大久保委員の追加について報告がなされた。

2. 作業部会・アフターケア委員会報告
以下のアフターケア委員会活動について報告がなされた。
・外来種検討作業部会
・尖閣諸島魚釣島アフターケア委員会
・上関要望書アフターケア委員会
・石狩海岸風車建設事業計画アフターケア委員会
・濃飛横断自動車道路アフターケア委員会
・辺野古・大浦湾の埋め立て中止を求める要望書アフターケア委員会

3. 各地区会報告
近畿地区会より、次の報告がなされた。1）長浜市トチノキ巨木群の保全について。2）亀岡市アユモドキ生息地の保全について。

4. 各担当委員報告
環境政策担当の吉田委員より、種の保存法・自然公園法等について報告がなされた。種々意見交換がなされ、種の保存法改正に伴う特定第 2 種国内希少野生動植物種に関する提言を検討することで意見が一致した。

5. その他
吉田委員長より第 66 回大会フォーラム開催「海岸生態系の保護とレジリエンス」（2019/3/17）について、連絡があった。

（文責：吉田正人）

7. 外来種検討作業部会

日　時：2019 年 3 月 15 日（金）10 時半－ 12 時
場　所：神戸国際会議室 305 号室
出席者：村上・五箇・池田・岩崎・上原・刈部・川上・草刈・小池・佐藤・常田・中井・増澤・横畑　オブザーバー 2 人

議題：

1. 部会長の交代
昨年度の決定に基づき部会長を村上から五箇公一氏に交代。

2. 委員会の検討項目と引き継ぎ事項
・部会委員が係わっている課題に関する情報交換と支援
・外来種に関する要望書の提出
・他学会との連携や協働
・環境省との協力や協働
・防除マニュアルの整理と最新の防除マニュアルの作成
・外来生物法の評価　課題の抽出と法改正か運用の改正
・外来種防除ハンドブック（仮称）の作成

3. 特定外来生物の追加指定
次年度は昆虫と植物の予定で現在検討中　夏頃公表の予定
アメリカザリガニを特定外来生物に指定することを目指して、生態系影響の証拠や指定のメリット等を調べる。アカミミガメも同様（苅部さん中心）
ムネアカハラビロカミキリの侵略性が高く在来のハラビロカミキリの置き換わりが生じている。本種は中国からの竹箒由来で、今後各地に分布拡大する可能性が高い。
生態系被害防止外来種リストに掲載されていても特定外来生物に指定されないと対策はとられない傾向がある。リストの活用が課題。

4. その他外来種防除の取り組み事例について
フォーラム U5 の開催：タイワンザル（白井）フイリマングース（亘）ネズミ類（橋本）アルゼンチンアリ（五箇・村上）白山のコマクサ（増澤他）
その他　魚釣島（横畑）アライグマ（池田）の報告を受けた。

5. 外来種防除ハンドブック（仮称）の作成
現在日本各地で実施されている外来種対策の事例のうち主に成功事例を取り上げ、外来種対策のあり方に関してまとめる。

（文責：村上興正）

8. 将来計画専門委員会

日　時：2019 年 3 月 15 日（金）13:15-15:15
場　所：神戸国際会議場　Room H（503）
出席者（敬称略）：辻、粕谷、酒井、奥田、田中、佐竹、立木、塩尻、彦坂、山道、大串、佐藤、石川、三木、中川（オブザーバ）
欠席者（敬称略）：巌佐、中丸、小泉、北島、森長、五箇、黒川、土居

以下の議題に関し議論した。

1. 日本の生態学の国際化への取り組み
・プログラムのバイリンガル表記と E，B マークの記載の実現
・シンポジウムや自由集会へ B マーク標記の拡張
・英語口頭発表賞等の運営コスト削減のため座長や審査業務の軽減

2. 若手支援策と会員数減少対策
・学会サイエンスカフェ

・生態学に関する大学院合同説明会
3. 大型予算を獲得するためのサポート
・地球研プロジェクトなど分野融合型大型プロジェクトへの応募触発
・最先端型大型プロジェクトへの応募
今後、順次生態学会に提言する予定。

（文責：佐竹暁子）

9. 生態学教育専門委員会

2018 年度活動報告

1）日本生態学会誌 68 巻（2018）より連載「生態学の今と未来」開始。第 4 回まで掲載され、現在第 5 回目を準備中である。
2）生態学教育専門委員会の内規を作成し、7 月の理事会で承認された。
3）SSH 生徒研究発表会（8/8-9、神戸国際会議場）に参加し、日本生態学会の広報活動を行い、リーフレット 300 枚（4 参照）およびエコロジー講座の冊子を希望者に配布した。
4）「生態学」を知らない一般向け（おもに高校生）に、生態学とは何かを解説するリーフレットを製作した。今後もリーフレットをブラッシュアップしていきたいと考えており、リーフレットに載せるトピックのバリエーションも増やしたいと考えている。
5）生態学教育専門委員会合宿（2018/9/24, 京都女子大学）で一年間の連載の計画や、生態学会でのフォーラムの企画などをした。
6）生態教育データベースの運用では、サーバーの移転への対応。個別での写真提供のお願いをしている。運用から 3 年が過ぎたが、認知度、利用度が上がっていない。会員のみなさんから教材、写真の提供をぜひお願いしたい。
7）高等学校で扱われる「生物」の重要用語に対する意見のとりまとめを 12 月の理事会に提出した。
8）神戸大会での打ち合わせ会を行った。（2019/3/15）
9）生態学教育専門委員会主催のフォーラムへの非会員の参加について検討した。
10）フォーラムの開催（2019/3/16）「SDGs と生態学教育とのかかわり」
集会講演者：中田兼介・吉田丈人（東京大学）・松村湖生（関西大学中等部高等部）
コメンテータ：宮下直（東京大学）
生態学教育専門委員会主催のフォーラムへの非会員の参加について検討した。約 100 名の参加があり、盛況であった。
11）高校生ポスター発表審査への協力
（2019/3/17 10:00-17:00　コアタイム　10:30-12:30）
委員の中で、嶋田、西脇、廣瀬、中井、平山、畑田、中田が参加した。
12）高校生ポスターへの非会員（高校生ポスターをしない高校教員など）の参加について検討した。

新年度の計画

1）SSH 生徒研究発表会での生態学会の広報活動
2）日本生態学会誌での連載「生態学の今と未来」の継続
3）生態教育支援データベースの運営
4）生態学会でのフォーラムの開催
5）合宿の開催

（文責　畑田　彩）

10. 生態系管理専門委員会

2019 年 3 月 15 日　10:30 ～ 12:30 @ 神戸国際会議場 Room 303

出　席：鎌田、西廣、橋本、西田、山下、津田、白川、竹門、矢原（三木：オブザーバー）

報告

1. 2018 年度の活動

①生態系管理フォーラム
市民向けフォーラム「地域計画と自然環境保全」について報告があった。
主催：日本生態学会 生態系管理専門委員会
東邦大学理学部 野生生物保全研究センター
日時；2018 年 12 月 9 日（日）14:00 ～ 17:00
場所；東邦大学理学部 5 号館 5101 教室（東邦大学習志野キャンパス）
プログラム
主催者挨拶：長谷川 雅美（東邦大学）
話題提供 1：伊東 啓太郎（九州工業大学）「地域のグリーンインフラ保全・活用を目的とした協働のプロセス～福岡県福津市における環境基本計画策定、計画の実践と課題～」
話題提供 2：長谷川 啓一（(株)福山コンサルタント）「グリーンインフラの社会実装による自然環境保全を目指して～茨城県守谷市 × 福山コンサルタントの官民連携の取り組み～」
司会：西廣 淳（東邦大）　参加費：無料
参加者：85 名（うち生態学会の非会員 75 名）

②生態系管理演習
生態系管理演習について報告があった。今後の課題として、ターゲットの明確化、対象地の選び方、内容の共有の方法について議論を行った。
実施日：2018 年 7 月 27 日～ 28 日
内　容：1 日目　趣旨説明　橋本佳延
講習 1「日本の自然再生の現状」岡野隆宏
講習 2「生物多様性課題解決を社会に実装するには？」白川勝信
演習：白川、山下、岡野（ファシリテーター）
2 日目　現地見学、生物調査、自然再生地での意見交換
受講料：10,000 円
参加者：13 名（コンサル職員 5 名、市民団体 4 名、行政担当者 4 名）

議題

1. 2019 年度の活動

①生態学会大会中のフォーラム
3 月 17 日 12:45-14:15 に「学会と社会とをつなぐ生態系管理専門委員会の役割と運営のこれから」を開催し、今後の活動方針や委員会の構成方法について議論する。

②生態系管理演習

生態系管理演習を以下の予定で行うことが提案され、承認された。

日程：2019 年 7 月 19 ～ 20 日

場所：八王子大学セミナーハウス、八王子市長池公園

企画者：橋本佳延、白川勝信、西田貴明

予算案

2019 年度 日本生態学会自然再生演習 収支予算書（案）

収入

日本生態学会講習会開催費	15 万円
参加費（両日）10000 円 ×15 人	15 万円
参加費（初日のみ）5000 円 ×10 人	5 万円
合計	35 万円

支出

講師旅費（1 泊 2 日関西）×2 名 1.5 万円 ×2 名	3 万円
講師旅費（1 泊 2 日　関東）×2 名 4 万円 ×2 名	8 万円
講師旅費（2 泊 3 日　広島）×1 名 7 万円 ×1 名	7 万円
講師謝金（学会員以外）1 万円 ×1 日 ×2 名	2 万円
会議室	3 万円
チラシデザイン	2 万円
資料印刷・小道具	5 万円
予備費	5 万円
合計	35 万円

③講習会等

今後、検討する。

2. 次期委員会の組織体制と運営について

次期委員長候補者を仮に決めて 2020 年からの新体制を議論することとし、西廣副委員長を次期委員長候補者とすることが承認された。新体制は、他分野との連携を強化できるように、一部の委員を公募しつつ構築することとした。新体制のあり方を考える上での基礎となる委員会の目的や中期目標等を、大会フォーラムや委員会議論で明確化することとした。

3. その他

これまで自然再生講習会等でかかわりがあった地域（麻機遊水地、宝ヶ池、億首川、阿蘇など）の現状について、情報交換が行われた。

（文責：鎌田磨人）

11. 大規模長期生態学専門委員会

日　時：2019 年 3 月 15 日　13:15-15:15

場　所：第 66 回日本生態学会大会、神戸、神戸国際会議場控室 2

出席者：村岡裕由（岐阜大学）、中村誠宏（北海道大学）、伊東明（大阪市立大学）、木庭啓介（京都大学）、大手信人（京都大学）

大規模長期生態学関連諸組織の活動状況報告

JaLTER

・昨年 10 月 ILTER-EAP 会議が台中で行われ、OSM（Open Science Meeting）が同時に実施された。EAP の Chair は、村岡裕由委員

GEO（地球観測に関する政府間会合）

・In situ 観測との連携強化が図られる方針

（村岡）

Ecological Research 関連

・Data paper/data DOI の準備を進めている

・Ecological Research の方に references を載せる検討を行っている

・Data paper を用いたデータレスキューに関する自由集会開催

・Idea Paper の企画（自由集会を開催）

（中村）

関東地区会シンポジウム「森林生態系長期モニタリングの課題と今後の展望」

・2019/03/6 に実施

（黒川）

The Forest Global Earth Observatory（ForestGEO）について

・CTFS ネットワークという名称で Smithsonian Institution が仕切っている熱帯林長期観察調査区の国際ネットワークが、現在は、温帯地域にも拡張され、名前を The Forest Global Earth Observatory（ForestGEO）と変えて発展している。

（伊東）

マスタープラン（第 24 期学術の大型施設計画・大規模研究計画）の作成について

・生態学コミュニティからの大規模研究計画（学術会議）の提案書の作成が進んでいる。「東アジア生物多様性ホットスポット：生物多様性の網羅的観測、維持機構解明、そして管理・設計へ（仮題）」

（木庭、中野）

Future Earth、Transformations to Sustainability　プログラムの活動について

・生態系、生物多様性科学的研究を内包する超学際的な研究プログラム、FE、T2S が走っている。日本では Belmont Forum/JST からのファンディングのコールが出ている。FE は ICSU 系（自然科学系）、T2S は ISSC 系（社会科学系）からの offer という位置づけ。

（大手）

新年度の活動計画

・AsiaFlux/JaLTER Joint Work Shop/Open Science Meeting（9 月 -10 月初旬）

・GEO（日本での生態系・生物多様性の研究を強化、地球観測推進部会）

・学術会議マスタープランの作成・応募（生態研、JaLTER の活動をベースに）「東アジア生物多様性ホットスポット：生物多様性の網羅的観測、維持機構解明、そして管理・設計へ（仮題）」、3 月末に締め切り、ヒアリングは今秋

・全国演習林の森林プロットデータのデータベース化演習林の業務でとっている森林データの公開を、日浦（北大）、榎木（九大）、鈴木（東大）とともに石原が科研費（研究成果公開促進費）に申請中。昨年、全国演習林協議会の共同研究課題としても承認され、集めたデータの解析も行う。演習林に限らず、研究者のデータも希望があれば追加し、データ・フォーマットを整え、メタデータも英語化し、いずれ

Ecol.Res. のデータペーパーとして投稿・公開予定。
・Global Land Programme Open Science Meeting が 4 月 24-26 日にベルン、スイスで開催。多様なステークホルダーとの超学際研究を進めている GLP。OSM では従来の学会の枠を超えて、様々なステークホルダーを加えたパネルディスカッション形式、ワールド・カフェ形式などのセッションを推奨。またトレーニングコースも開催。
https://glp.earth/osm/osm-2019/schedule-and-program

（文責：大手信人）

12. 野外安全管理委員会

日　時：2019 年 3 月 15 日　10:30-11:30
場　所：神戸国際会議場　306 控室
出席者：飯島、石原、大舘、奥田、粕谷、北村、鈴木

2018 年度活動報告

・野外調査安全管理マニュアル出版準備状況
・心肺蘇生法手順の転載許可を日本医師会より得て脱稿。校正後に日本生態学会誌に投稿。
・65 回大会でのランチョンセミナー、ポスター掲示
札幌大会でランチョンセミナーを実施。参加者は約 50 名。アンケートの結果、参加者の 50％超が学部生。約 80％が有用だったと回答。ポスター縮刷版の希望があり送付。
・66 回大会でのランチョンセミナーとポスター展示の準備を進めた。
・2018 年度に起きた事故事例等について意見交換した。
・海外調査の実施判断への外務省海外安全情報の活用法について議論した。

2019 年度活動予定

・66 回大会でランチョンセミナーとポスター展示
ランチョンセミナーを 3 月 17 日に実施する。ポスター展示も行う。
・67 回大会でのランチョンセミナーとポスター展示の準備を行う。
口演者の変更、内容の改訂を進める。指導者にどのように最新の情報を届けるかが課題。
フォーラム内容の動画配信の検討
フォーラムで扱っている内容を動画化し、インターネット公開に向けて検討と準備を進める
・事故情報の収集と集約
引き続き、野外調査、実習中の事故や冷やりハッと事象の例を収集し、 解析を続ける。該当の事例があれば､野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。

（文責：鈴木準一郎）

13. キャリア支援専門委員会

出席者
委員:宮下、上野、木村、中坪、鈴木（智）、鈴木（牧）、曽我、高村、西田、水野、森田、小柳、小山
オブザーバー：可知、深谷、別宮

議題

1　神戸大会での企画
キャリア支援関連
1）キャリア支援フォーラム（U01　3 月 16 日 13:15-14:45 Room H）
「その時どうした？人生の選択の裏側を聞いてみよう」
2）キャリア支援相談室（3 月 16 日 9:00-17:00　407 号室）
3）人材募集中の企業等のパンフレット配架用スペース（大会期間中、会場内に設置）
男女共同参画関連
1）男女共同参画ﾗﾝﾁｮﾝﾌｫｰﾗﾑ（U11　3 月 18 日 12:15-13:45 Room F）
「生態学会参加者の年齢・ジェンダーバランスの変化：参加者の多様性評価を未来につなぐ」
2）こども生態学講座
「はくぶつかんたんけん in 大阪市立自然史博物館」（2019 年 3 月 17 日）
3）託児所・ファミリー休憩室
2　来年度の活動計画
1）男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年 4 回程度）
2）男女共同参画学協会シンポジウムへの参加（年 1 回）
3）女子中高生夏の学校、理工チャレンジへの参画
4）第 4 回大規模アンケート（第 4 回科学技術系専門職の男女共同参画実態調査）の生態学会部分の解析と公表
5）私立中高・理系教員選考会への参画
6）キャリア支援専門委員会 HP の運営、メーリングリスト、Pukiwiki 管理
3　名古屋大会に向けた活動
1）キャリア支援フォーラム
2）男女共同参画ランチョンフォーラム
3）企業パンフレット展示
4）託児室・ファミリー休憩室
5）こども生態学講座

（文責：宮下直）

14. 電子情報委員会

1. 新サーバの導入
旧式化した ATSERVER 社のレンタルサーバを代替するために､2018 年 4 月から新サーバの導入しました。新サーバの導入においては IT 技術者にシステムを稼働する作業を依頼し､その後は電子情報委員会で保守･管理していました。
2. 電子情報委員会の廃止
電子情報委員会は、同委員会を廃止にすることを、生態学会理事会に提案し、了承されました。その理由としては、サーバセキュリティーの複雑化しつつある状況のもとで専門性の高い外部の IT 技術者にサーバ保守業務を委託するのが合理的と判断したためです。理事会、委員の合意を受け、久保（元・電子情報委員長）が相談役（仮）、そして大澤理事が情報担当理事として当面フォローすることを前提に決定しました。
3. 電子情報委員会廃止後の生態学会サーバの運用

学会事務局が窓口となって学会外部のIT技術者に管理を委託、つまり生態学会サーバ管理の外部の技術者に委託します。サーバ管理を外部に委託する前に、学会業者委託で処理すべき作業範囲を整理します。一方で、（学会事務局で多用される）転送設定などは、GUIシステムを導入して簡素化を進める予定です。サーバ内のシステムの一部を代替・改善するために緊急の支出が必要な場合は、次の[4]で述べる「チケット契約」（案）で対応します。

4. 外部のIT技術者に保守を委託する「チケット契約」

電子情報委員会廃止後については、サーバ移行を受託した札幌のIT企業株式会社MIERUNEに保守契約の実現可能性について相談し、30万で10回程度のメンテナンス、技術対応を実施するという一種のチケット契約（案）の準備を完了しました。例えば何かトラブルが発生した場合、チケットを1枚利用して技術相談および基本的な範囲での解決までを依頼するという形です。

年間ごとの定額制なので、仮にトラブルが皆無であったとしてもが不具合が発生しなければ、チケットの料金は返金されません（中小企業の初級SEの技術単価が月60-80万という資料もありますので、決して高いものではないと考えています）。なお、大規模な改修や対応が必要な場合は別業務として依頼する必要があります。チケットでどこまで対応できるかについては、トラブルを避けるために具体的に契約内容に盛り込むということを想定し、現在調整を進めています。

（文責：久保拓弥）

15. 各地区会への還元金と配分方式について

■ 2017年までの地区会への予算配分状況

・2017年まで各地区会には、「地区会費（0～700円）」と会費収入の4%相当である「還元金」を送付していました。2016年（従来の制度）の地区会への送金合計（地区会費＋還元金）は、約220万円でした。

・一般社団法人日本生態学会としては、全体を一つとした会計が望ましいことから、ESJ64（東京大会）の総会におきまして「各地区会費0円」が決議され、地区会費は2018年から0円となりました。

■ 新たな地区会費配分方式の検討

・2018年度は、会費収入の4%相当である「還元金」のみの送付になりましたので、今後の地区会費のあり方について理事会で検討し、2017年12月の理事会にておいて執行部案を決議しました。

■ 理事会決議された執行部案

・還元金は会費収入の4%から6%（208万円）に増額します。これは、以前の送付合計金額にほぼ相当します。

・ただし、特に会員数が少ない地区会に対する不利益を相殺するために、会員数が多い地区会にはご努力いただき、還元金の半分は各地区会で等分し（104万円／7地区）、残りを各地区会の会員数で比例配分させていただきます。この案では、当面どの地区会も残高が赤字になることなく、地区会活動を継続することができます。生態学会全体の収支も、現状と変わりません。

・この提案は、2018年2月～2019年2月の間に、全地区会で承認されました。

・2019年3月の総会でご報告し、2020年の還元金から変更します。

・地区会選挙の電子投票を希望される場合、その経費は地区会費から支払う必要はございません。

・今後、各地区会の財政状況をご報告いただき、配分方式等は柔軟に検討したいと考えております。

＜参考：還元金6%、等分配分シナリオ＞

還元金6%	一般	学生	送金計	等50%	比例50%	送付合計
北海道	153,075	44,700	197,775	148,586	98,888	247,474
東北	105,675	33,675	139,350	148,586	69,675	218,261
関東	631,733	121,800	753,533	148,586	376,767	525,353
中部	247,500	46,050	293,550	148,586	146,775	295,361
近畿	282,600	108,075	390,675	148,586	195,338	343,924
中四国	121,125	21,000	142,125	148,586	71,063	219,649
九州	134,250	28,950	163,200	148,586	81,600	230,186
総計	1,675,958	404,250	2,080,208	1,040,102	1,040,106	2,080,208

（文責：陀安一郎）

16. 学会財政改革進捗状況について

2017年3月東京大会総会報告資料より

1. 学会誌とニュースレターの冊子体印刷・配送を廃止する。ただし、学会誌の冊子体を希望する会員にはオンデマンド印刷により有料配布。非会員の定期購読は継続。ニュースレターは会員に一斉メール送信。冊子体廃止の導入効果は、ER（東京大会で導入を決議）で300万円、生態誌で150万円、ニュースレターで50万円の支出削減（保全誌は未定）。
2. 年度予算の繰越金（地区会費を除く）が3000万円を下回る場合、単年度収支の赤字額は、原則として大会参加費予算の増額により補てんする。
3. 正会員の会費は、一般が現行の平均水準（11,700円）を超えない額とし、学生は一般の半額程度とする。
4. 賛助会員の会費は、生態誌と保全誌の冊子体購読費等に基づき、別途、定める。
5. 低収入の国に在住する会員に対する優遇措置を検討する。
6. 民間からの寄付を受け付ける窓口を設置する。
7. この改革案は札幌大会総会で決議し、2019年1月より施行する。

2018年3月時点での進捗状況

1. ERとニュースレターの冊子体の印刷・配送は廃止済み。生態誌と保全誌に関しては、財政状況を見ながら検討中。
2. 現状で繰越金（地区会費を除く）は3000万円以上。
3. 学生会員の会費等は、科研費の採択状況を考慮して検討する。
4. 賛助会員については、第5号議案で提案。
5. 低収入対象者の枠組みを理事会で検討中。
6. 民間の寄付を受け付ける窓口を2017年12月16日付

けで生態学会ホームページに設置。
7. 1. 3. 5. の検討事項は精査の上、神戸大会総会に提案する。

2019 年 3 月時点での進捗状況

1. ER とニュースレターの冊子体の印刷・配送は 2018 年より廃止済み。生態誌と保全誌に関しては、3. 学生会員の会費の値下げを優先しため、今後も財政状況を見ながら検討する。
3. 学生会員の会費は、Ecological Research の出版費が大幅削減されるなど、財政状況が改善することが明らかになったため、理事会での議論を踏まえて、2019 年より 6,500 円から 4,500 円に減額した。
5. 低収入対象者の枠組みを神戸大会総会で提案する。

（文責：陀安一郎）

17. 監査報告

一般社団法人　日本生態学会
監事　粕谷英一・岡部貴美子

当法人の 2018 年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2018 年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、2019 年 2 月 8 日に学会事務局において会計書類を閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

2. 監査の結果

(1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
(2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
(3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

B. 審議事項

第 1 号議案　役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場意義なくこれを可決承認した。

・任期満了により退任する役員（任期：2017.3 総会後～ 2019.3 総会まで）
　理事：陀安一郎（専務理事）、木庭啓介（庶務担当）、北村俊平（会計担当）
　監事：岡部貴美子
・理事会推薦役員候補者（任期：2019.3 総会後～ 2021.3 総会まで）
　理事：永松大、三木健、黒川紘子
　監事：陀安一郎
（参考）上記以外の任期中の役員（任期：2018.3 総会後～ 2020.3 総会まで）
　理事：占部城太郎、湯本貴和、中川弥智子、久米篤、吉田丈人、巌佐庸、丑丸敦史、内海俊介、大澤剛士、佐竹暁子、鈴木まほろ、陶山佳久、東樹宏和、中野伸一、西廣淳、宮下直、可知直毅
　監事：粕谷英一

第 2 号議案　定款の変更に関する件

定款の変更案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場意義なくこれを承認可決した。

【現行】
第 2 章　会員
（種別）
第 6 条
10. 正会員は、法人法に規定された次に掲げる社員の権利を、社員と同様に当法人に対して行使することができる。
(1) 法人法第 14 条第 2 項の権利（定款の閲覧等）
(2) 法人法第 32 条第 2 項の権利（社員名簿の閲覧等）
(3) 法人法第 57 条第 4 項の権利（代議員総会の議事録の閲覧等）
(4) 法人法第 50 条第 6 項の権利（社員の代理権証明書等の閲覧等）
(5) 法人法第 52 条第 5 項の権利（電磁的方法による議決権行使記録の閲覧等）
(6) 法人法第 129 条第 3 項の権利（計算書類等の閲覧等）
(7) 法人法第 299 条第 2 項の権利（清算法人の貸借対照表の閲覧等）
(8) 法人法第 246 条第 3 項、第 250 条第 3 項及び第 256 条第 3 項の権利（合併契約等の閲覧等）

【変更案】
第 6 条
10. 正会員は、法人法に規定された次に掲げる社員の権利を、社員と同様に当法人に対して行使することができる。
(1) 法人法第 14 条第 2 項の権利（定款の閲覧等）
(2) 法人法第 32 条第 2 項の権利（社員名簿の閲覧等）
(3) 法人法第 57 条第 4 項の権利（代議員総会の議事録の閲覧等）
(4) 法人法第 50 条第 6 項の権利（社員の代理権証明書等の閲覧等）
(5) 法人法第 52 条第 5 項の権利（電磁的方法による議決権行使記録の閲覧等）
(6) 法人法第 129 条第 3 項の権利（計算書類等の閲覧等）
(7) 法人法第 229 条第 2 項の権利（清算法人の貸借対照表の閲覧等）
(8) 法人法第 246 条第 3 項、第 250 条第 3 項及び第 256 条第 3 項の権利（合併契約等の閲覧等）

第 3 号議案　2018 年決算承認に関する件

当期（自 2018 年 1 月 1 日至同年 12 月 31 日）における決算案について満場意義なくこれを承認可決した。

2018 年決算案　（2018 年 1 月 1 日～ 2018 年 12 月 31 日）

＜一般会計＞

収入の部			支出の部		
費目	18 予算	18 決算	費目	18 予算	18 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	28,000,000	27,860,300	ER	5,550,000	7,248,960
正会員（学生）	6,800,000	6,492,500	生態誌	3,000,000	2,313,356
賛助会員	1,900,000	1,602,000	保全誌	2,200,000	1,747,766
地区会費			Plant Species Biology		1,500,000
小　計	36,700,000	35,954,800	会誌発送費用	2,000,000	1,477,272
			ニュースレター	400,000	310,176
科研費			ER 英文校閲・翻訳	1,500,000	430,827
国際情報発信強化 A	14,000,000	14,000,000	ER 誌 Open Access 経費	3,000,000	2,984,300
公開講演会	1,200,000	1,400,000	和文誌編集費	500,000	419,958
小　計	15,200,000	15,400,000	小　計	18,150,000	18,432,615
学会誌売上げ	1,000,000	728,600	会議費	100,000	73,253
出版印税	1,000,000	1,160,285	旅費・交通費	3,000,000	2,602,016
広告代	200,000	230,000	人件費	14,000,000	16,049,536
著作権使用料	300,000	340,474	地区会活動費	2,500,000	2,477,302
大会収入	22,000,000	22,143,242	大会支出	22,000,000	22,893,007
EAFES 収入	7,000,000	7,928,000	公開講演会	1,200,000	1,200,006
講習会費	100,000	95,000	INTECOL 会費	900,000	0
寄附金	0	0			
その他	5,000	2,010	事務費		
前年度繰越金	75,048,476	75,048,476	通信費	500,000	329,346
			消耗品費	200,000	130,326
			雑費	200,000	275,724
			決済代行手数料	1,000,000	829,172
			レンタルサーバ料	600,000	664,301
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	100,000	36,456
			小　計	4,280,000	3,945,325
			各種委員会費	2,500,000	1,011,891
			選挙費	0	0
			EAFES 費用	7,000,000	5,745,648
			講習会費	300,000	195,618
			会員管理委託費	4,500,000	4,621,899
			法人税	400,000	353,300
			次年度繰越金	77,723,476	79,429,471
合　計	158,553,476	159,030,887	合　計	158,553,476	159,030,887
単年度収入	83,505,000	83,982,411	単年度支出	80,830,000	79,601,416
			単年度収入 - 単年度支出	2,675,000	4,380,995

＜特別会計＞
賞準備金

収入の部			支出の部		
	18 予算	18 決算		18 予算	18 決算
前年度繰越金	13,163,137	13,163,137	賞金		
預金利息	0	107	宮地賞	334,110	334,110
			大島賞	111,370	111,370
			鈴木賞	150,000	150,000
			小計	595,480	595,480
			雑費	3,780	2,700
			次年度繰越金	12,563,877	12,565,064
合計	13,163,137	13,163,244	合計	13,163,137	13,163,244

貸借対照表

2018 年 12 月 31 日現在

一般社団法人　日本生態学会　（単位：円）

科目	金額	科目	金額
（資産の部）	円	（負債の部）	円
流動資産		流動負債	
現金及び預金	120,847,417	未払金	3,871,895
前渡金	1,120,762	未払法人税等	353,300
前払費用	166,479	前受金	33,554,900
		預り金	526,292
固定資産		固定負債	
特定資産 学会賞準備金資産	12,565,064	退職給付引当金	4,398,800
		負債合計	42,705,187
		（正味財産の部）	
		一般正味財産	79,429,471
		指定正味財産（うち特定資産への充当額）	12,565,064
		正味財産合計	91,994,535
資産合計	134,699,722	負債・純資産合計	134,699,722

第 4 号議案　2019 年予算承認に関する件

次期（自 2019 年 1 月 1 日至同年 12 月 31 日）における予算案について満場意義なくこれを承認可決した。

2019 年予算案（2019 年 1 月 1 日～ 2019 年 12 月 31 日）

＜一般会計＞

収　入　の　部			支　出　の　部		
費　目	18 決算	19 予算	費　目	18 決算	19 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	27,860,300	27,500,000	ER	7,248,960	—
正会員（学生）	6,492,500	4,500,000	ER・PE・PSB	—	400,000
賛助会員	1,602,000	1,500,000	生態誌	2,313,356	3,000,000
地区会費			保全誌	1,747,766	2,000,000
小 計	35,954,800	33,500,000	Plant Species Biology	1,500,000	—
			会誌発送費用	1,477,272	1,000,000
科研費			ニュースレター	310,176	300,000
国際情報発信強化 A	14,000,000	12,800,000	英文校閲・翻訳	430,827	500,000
公開講演会	1,400,000	1,200,000	ER 誌 Open Access 経費	2,984,300	3,000,000
小　計	15,400,000	14,000,000	和文誌編集費	419,958	500,000
			小　計	18,432,615	10,700,000
学会誌売上げ	728,600	700,000			
出版印税	1,160,285	1,000,000	会議費	73,253	100,000
広告代	230,000	180,000	旅費・交通費	2,602,016	3,000,000
著作権使用料	340,474	300,000	人件費	16,049,536	16,000,000
大会収入	22,143,242	25,600,000	地区会活動費	2,477,302	3,000,000
EAFES 収入	7,928,000	—	大会支出	22,893,007	28,300,000
講習会費	95,000	100,000	公開講演会	1,200,006	1,400,000
寄附金	0	0	個体群生態学会出版企画費	—	350,000
その他	2,010	2,000	INTECOL 会費	0	1,350,000
前年度繰越金	75,048,476	79,429,471			
			事務費		
			通信費	329,346	400,000
			消耗品費	130,326	200,000
			雑費	275,724	300,000
			決済代行手数料	829,172	900,000
			サーバ関連費	664,301	500,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	36,456	—
			小　計	3,945,325	3,980,000
			各種委員会費	1,011,891	1,500,000
			選挙費	0	300,000
			EAFES 費用	5,745,648	200,000
			講習会費	195,618	200,000
			会員管理委託費	4,621,899	4,600,000
			大会システム改修費	—	1,320,000
			法人税	353,300	400,000
			次年度繰越金	79,429,471	78,111,471
合　計	159,030,887	154,811,471	合　計	159,030,887	154,811,471

単年度収入	83,982,411	75,382,000	単年度支出	79,601,416	76,700,000
			単年度収入 - 支出	4,380,995	-1,318,000

＜特別会計＞
学会賞準備金

収　入　の　部			支　出　の　部		
	18 決算	19 予算		18 決算	19 予算
前年度繰越金	13,163,137	12,565,064	賞金		
預金利息	107	0	宮地賞	334,110	222,740
			大島賞	111,370	222,740
			鈴木賞	150,000	200,000
			小計	595,480	645,480
			雑費	2,700	4,320
			次年度繰越金	12,565,064	11,915,264
合　計	13,163,244	12,565,064	合　計	13,163,244	12,565,064

第 5 号議案　入会及び会費規則の改訂に関する件

入会及び会計規則の改定案について以下の提案があり、その承認を求めたところ、満場意義なくこれを承認可決した。

学会財政改革に関する 2017 年 3 月東京大会総会報告資料のうち、理事会継続審議となっていた低収入の国・地域に在住する会員に対する優遇措置について、理事会で検討を行った。入会及び会費 規則の 9 条（下記参照）で低収入の正会員（一般）向けに年会費の減額措置をとっているが、低収入の国・地域に在住する会員が日本国内に在住の会員と毎年同様な申請手続きをとることは煩雑になるため、下記の規則の改訂を執行部で提案し、理事会の承認を受けたので、総会に提案する。

【執行部案】

・低収入国・地域の定義

OECD が定める最新の ODA 受け取りリスト（3 年毎に更新）に掲載されている国・地域（添付資料 1）。具体的には、以下の基準のどちらかに当てはまる国･地域。

1）世界銀行によって「高所得国」以外に分類される国･地域（2016 年時点の一人当たり国民所得（GNI）が 12,235 米ドル以下の国々）

2）国連によって後発開発途上国（Least Developed Countries）に分類される国・地域（一人当たり国民所得（GNI）、人的資源指数（HAI）、経済脆弱性指数（EVI）によって判断）

2019 年 3 月 6 日時点の海外一般会員 41 名のうち 9 名が該当（中国とタイ）。

・年会費の減額措置

正会員（一般）の会費を通常の正会員（学生）と同じに減額する。

・想定している対象

日本で学位を取得後、帰国する留学生などの既会員。新規入会時には認めない方針。

・規則の変更案

一般社団法人日本生態学会 入会及び会費 規則の 10 条以下を変更する（下線部分）。

第 9 条　本法人では所得の少ない正会員（一般）のために、以下の要件をすべて満たす場合には、本人の申請に基づいて翌年度の年会費を正会員（学生）と同額にする措置を実施することができる。

①年間所得が 200 万円以下

②申請時点で当該年度の学会費が納入済である事

第 10 条　本法人では低収入国・地域に居住する正会員（一般）のために、以下の要件をすべて満たす場合には、本人の申請に基づいて翌年度の年会費を正会員（学生）と同額にする措置を実施することができる。

① OECD が定める最新の ODA 受け取りリストにある国・地域に居住する事

②申請時点で当該年度の学会費が納入済である事

第 11 条　本法人の非会員に向けた学会誌（冊子体）の定期購読料は、以下に掲げる年額とする。なお、Ecological Research の定期購読は、出版社との契約事項により、本法人では受付けない。

①日本生態学会誌　9000 円

②保全生態学研究　5000 円

第 12 条　この規則の改訂は総会の承認を得なければならない。

附 則

①この規則は、平成 26 年 1 月 24 日から施行する。

②この規則は、平成 30 年 1 月 1 日から施行する。

③この規則は、2019 年 1 月 1 日から施行する。

④この規則は、2020 年 1 月 1 日から施行する。

第 6 号議案　第 69 回大会（2022 年）担当地区会に関する件

第 69 回大会（2022 年）担当地区会候補九州地区の提案があり満場意義なく承認可決した。

Ⅱ．第 66 回日本生態学会大会の記録

第 66 回日本生態学会大会は神戸国際会議場・展示場を会場として 2019 年 3 月 15 日～ 3 月 19 日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム 21、自由集会 32、フォーラム 12、一般講演（口頭発表）269、一般講演（ポスター発表）918、高校生ポスター 81、ジュニア生態学講座、こども生態学講座が行われました。参加

者は 2,799 名でした。5 日間の日程とポスター賞（日本生態学会公認表彰）・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日　程

3 月 15 日　代議員会、各種委員会（大会企画委員会、Ecological Research 刊行協議会、日本生態学会誌刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会）、自由集会

3 月 16 日　公開講演会、シンポジウム、自由集会、一般講演（口頭発表）、フォーラム

3 月 17 日　シンポジウム、自由集会、一般講演（口頭発表・ポスター発表）、フォーラム、高校生ポスター、ジュニア生態学講座、こども生態学講座

3 月 18 日　総会、各賞授賞式、受賞講演、一般講演（ポスター発表）、フォーラム、懇親会

3 月 19 日　シンポジウム、一般講演（口頭発表）

ポスター賞受賞者

＜外来種＞

【最優秀賞】

「ノネコから解放されたアマミノクロウサギ～駆除による回復評価～」* 風戸一亮（東京大学），沢登良馬（環境省），前田玉青（京都大学），中下留美子（森林総合研究所），亘悠哉（森林総合研究所），宮下直（東京大学）

【優秀賞】

「輸入穀物を介して侵入する外来植物の国際貿易港における定着状況」* 池田茉史（京都大学），下野嘉子（京都大学），西健志（京都大学），浅井元朗（農研機構），冨永達（京都大学）

「時空間的に変化するネコ - ネズミ - ミズナギドリの捕食被食関係から Hyperpredation を探る」* 徳吉美国（東京大学），岡奈理子（山階鳥類研究所），亘悠哉（森林総合研究所），中下留美子（森林総合研究所），安積紗羅々（北大・水産），宮下直（東京大学）

＜群落・遷移・更新＞

【最優秀賞】

「広葉樹林の皆伐地における萌芽と実生の競争」* 小﨑惇平，川口英之（島根大学）

【優秀賞】

「種分布モデルによる最終氷期の植生図から推定した現存植生図の精度検証」* 設樂拓人（筑波大学），相原隆貴（筑波大学），上條隆志（筑波大学），松井哲哉（森林総合研究所）

「群馬県玉原湿原における植生管理実施後の地下水環境の変化と植生分布への影響」* 大隅翔馬（東京農工大学・院・農），吉川正人（東京農工大学・院・農），福嶋司（東京農工大学）

＜景観＞

【最優秀賞】

「水田に依存しないサシバ：田植えの時期の遅れと餌の種プールの効果？」* 鬼頭健介（東大・農），藤田剛（東大・農），伊関文隆（希少生物研究会），宮下直（東大・農）

【優秀賞】

「都市景観における害虫駆除サービスの定量化：artificial caterpillar を用いた検証」* 島田翔，吉田薫，曽我昌史（東京大学）

＜行動＞

【最優秀賞】

「チリメンカワニナの汽水域集団でみられる概潮汐リズムとその遺伝基盤の探索」* 横溝匠（千葉大・理），高橋佑磨（千葉大・院・理）

【優秀賞】

「ナゴヤダルマガエルがもつ異種間求愛拒否行動はどのように進化したのか？」* 伊藤真（京都大学）

「寄生蜂はアリ防衛の穴を見抜けるか？－ムラサキシジミを例に」* 中林ゆい（京都府立大学），望岡佑佳里（佐賀大学），末松俊二（佐賀大学），大島一正（京都府立大学），徳田誠（佐賀大学）

「ミツボシツチカメムシにおける雌親の存在と給餌が幼虫のパフォーマンスに及ぼす影響」* 松岡宏樹（佐賀大学・院），側垣共生（鹿児島大学・院），野間口眞太郎（佐賀大学・院）

＜植物個体群＞

【最優秀賞】

「硫気孔原土壌への進出による遺伝的帰結」* 長澤耕樹（京都大学），瀬戸口浩彰（京都大学），牧雅之（東北大学），後藤隼（東北大学），福島慶太郎（京都大学），井鷺裕司（京都大学），陶山佳久（東北大学），綱本良啓（森林総研東北支所），阪口翔太（京都大学）

【優秀賞】

「同所的に生育するエチゼンダイモンジソウとダイモンジソウの遺伝構造比較」* 孫田佳奈（京都大学），阪口翔太（京都大学），廣田峻（東北大学），綱本良啓（森林総合研究所），陶山佳久（東北大学），赤井賢成（（一財）沖縄美ら島財団），瀬戸口浩彰（京都大学）

＜植物繁殖・生活史＞

【最優秀賞】

「サワシロギクの蛇紋岩適応には微生物も役に立つ～根の内生菌は何がいてる？～」* 真鍋遼（大阪府立大学），福島慶太郎（京都大学），阪口翔太（京都大学），石川直子（東京大学），伊藤元己（東京大学），西野貴子（大阪府立大学）

【優秀賞】

「岡山県北部に分布するテンナンショウ 5 種の受粉前生殖隔離」* 松本哲也（岡山大院環境生命），廣部宗（岡山大院環境生命），末吉昌宏（森林総研九州），宮﨑祐子（岡山大院環境生命）

＜植物生理生態＞

【最優秀賞】

「針葉樹と広葉樹の樹冠構造の違いに見られる樹木の光獲得戦略と森林生産性の関係」* 吉田雅理（京都大学），北山兼弘（京都大学），菱拓雄（九州大学），小野田雄介（京都大学）

【優秀賞】
「クスノキ老大木の通水構造（2）老木と成木の通水構造の比較」* 野口結子，難波結希，原千夏，黒田慶子，石井弘明（神戸大学大学院）
「カナダに生育するクロトウヒにおける伸長成長と肥大成長の関係」* 田邊智子, 檀浦正子, 大澤晃（京都大学）

＜進化＞

【最優秀賞】
「アマゴの堰堤上流個体群における局所適応：増水に起因した幼魚形態の進化」* 山田寛之，和田哲（北海道大学）
【優秀賞】
「Evolution of gene related high-sensitive hearing ability among birds and mammals」*Lida SANCHEZ SANCHEZ, Atsushi Ikemoto, Shinichiro Maruyama, Masakado Kawata (Tohoku University)
「陸産貝類において中間型を示す殻の色は生存に不利となるのか－標識再捕獲による検証－」* 伊藤舜，小沼順二（東邦大学）
「感覚便乗による鳥の声の地理的変異は交配前隔離の機構としてはたらく」* 植村慎吾, 高木昌興（北海道大学）

＜生態系管理＞

【優秀賞】
「AI 技術を用いた鳴き声自動判別システムによる調査手法の開発～オオタカを事例として～」* 前川侑子（国際航業（株）), 牛込祐司（国際航業（株）), 黒田治男（日本鳥学会），松井孝典（大阪大学）
「人間社会および土地管理シナリオと森林景観モデルを用いた動物種の生息適地の将来予測」* 前田真理美，芳賀智宏，松井孝典，町村尚（大阪大学）

＜生物多様性＞

【最優秀賞】
「ボルネオ島の熱帯低地林における維管束着生植物のハビタット分割様式」* 駒田夏生（京大院），中西晃（京大院），田金秀一郎（鹿児島大・博物館），清水加耶（島根大・生資），Paulus Meleng（Forest Department Sarawak），市岡孝郎（京大院），神崎護（京大院）
【優秀賞】
「最終氷期後の分布拡大による二次的接触がブナ林の樹上性昆虫に与える影響」* 木村彰宏，池田紘士（弘前大学）
「農業用水路における水生植物群集の季節変化と農業利用方法の関係」* 槐ちがや（筑波大生命環境科学），上條隆志（筑波大生命環境系），田中法生（国立科博）

＜動物と植物の相互関係＞

【最優秀賞】
「花蜜食に特殊化したガ類は深い蜜源の花を好むか？」* 阪上洸多，杉浦真治（神戸大・院・農）

＜動物群集＞

【最優秀賞】
「肉の腐敗にどう抗うか？ー微生物への対抗ともう 1 つの戦略ー」* 橋詰茜（日大・生物資源），山中康如（日大･生物資源），笠原康裕（北大･低温研），大舘智志（北大･低温研），幸田良介（大阪･環農水研），中島啓裕（日大・生物資源）
【優秀賞】
「音声調査による針葉樹人工林と皆伐地におけるコウモリの活動量の比較」* 牧貴大（筑波大学），安井さち子（つくば市大角豆），上條隆志（筑波大学）
「岩礁潮間帯のヤドカリ群集に対する海洋酸性化の影響」* 戸祭森彦，今孝悦（筑波大学）

＜動物個体群＞

【最優秀賞】
「カワラハンミョウの体色における背景マッチングとその適応的意義」* 山本捺由他，曽田貞滋（京都大学大学院）
【優秀賞】
「ツキノワグマ（*Ursusthibetanus*）の食性の種内変異」* 森智基（信州大学），中田早紀（信州大学），佐藤知弥（信州大学），瀧井暁子（山岳科学研究所），高畠千尋（山岳科学研究所），泉山茂之（山岳科学研究所）
「リュウキュウコノハズクの主要な繁殖期餌生物アマミヘリグロツユムシの餌植物利用」* 西村健汰（中央大学），井上遠（東京大学），鷲谷いづみ（中央大学）

＜動物繁殖・生活史＞

【最優秀賞】
「自身の性と他個体の性がサクラマス幼魚の成長を決める」* 舞田穂波（北大環境科学院），渥美圭佑（北大環境科学院），岸田治（北大 FSC），小泉逸郎（北大環境科学院）
【優秀賞】
「タンガニイカ湖産カワスズメ科魚類における協同繁殖」* 佐伯泰河，佐藤駿，安房田智司，幸田正典（大阪市立大学）

＜物質循環＞

【最優秀賞】
「森林生態系におけるリン供給源としての土壌微生物ターンオーバーの重要性」* 横山大稀（京都大学），岡田慶一（横浜国立大学），森大喜（森林総合研究所），北山兼弘（京都大学）
【優秀賞】
「Inter-annual variations in carbon cycle and budget between cool-temperate young and old-growth forests dominated by *Pinus densiflora*」*Yuta KOYAMA (Waseda Sci. & Engi.), Eri Suzuki (Tokyo Tech Univ.), Yuki Kato (Waseda Sci.& Engi.), Mitsutoshi Tomotsune (Waseda Edu.), Hiroshi Koizumi (Waseda Edu.)

＜保全＞

【最優秀賞】
「耕作放棄地の鳥類の生息地価値は北海道全域で湿原に匹敵する：機能群に着目して」* 北沢宗大（北大・農），山浦悠一（森林総研・植生），河村和洋（北大・農），先崎理之（国環研），埴岡雅史（環境省），中村太士（北大・農）
【優秀賞】
「希少タナゴ類における在来種と人為移入種との交雑：遺伝子浸透の実態」* 植村洋亮（愛媛大・理），大内魁人（愛媛大・院理工），松葉成生（愛媛大・院理工），

畑啓生（愛媛大・院理工）
「人と登山する種子：靴を介した高山域への種子持ち込み実態と持ち込む人の特性・心理」* 西澤文華（農工大院），久保雄広（国立環境研究所），小山明日香（森林総合研究所），赤坂宗光（農工大院）
「植生回復ポテンシャルを維持するための「シードバンクマネジメント」」* 安藤果純（東邦大学），Ran-Young Im（Toho Univ.），Ji Yoon Kim（Toho Univ.），西廣美穂（自愉企画），西廣淳（東邦大学）

高校生ポスター賞受賞者

【最優秀賞】
「低コスト型の屋上緑化を成功させるには？ ～植物の生育特性に依存する混植の効果～」* 篠原咲希音（東大附属中等教育学校），澤野咲来（忍岡高等学校）
「雄ザルの子ザルに対するグルーミング行動の要因」* 上野真穂，湯浅篤文（大分舞鶴高等学校）
「線虫（C. elegans）の紫外線学習の発見とメカニズムの解明」* 小澤一毅（茗溪学園高等学校）
「南日本における港のアリの地域間比較」* 浅井嘉乃，荒場麻瑚，藤山佳保里，日笠山円来（池田学園池田高等学校）

【優秀賞】
「ため池における水生植物群落の保全と復元について」* 原田茜音，薄田実咲（秋田中央高等学校）
「鱗翅類の撥水性に関する分析」* 中山和奏（神戸大学附属中等），米田貴（神戸大学附属中等），森田健太（神戸大学研究基盤センター）
「ホバリング飛行能力をもつ蛾　ホウジャク亜科の秘密に迫る」* 岡島紗良，子林美緒（岐山高等学校　生物部）
「日本近海に生息する Microcotyle 属単生類の系統および分類学的研究」* 小野夏実，西尾彩里，瓦田優香，井上愛菜，香村祐佳（白陵高等学校）
「円網の巣を作るクモの縦糸には本当に粘球がないのか」* 筧迅，杉浦太智，橘広将，西木杏佳（兵庫県立西脇高等学校）

【審査員特別賞】
「茎寄生植物スナヅルの生き残りのための工夫」* 古谷優樹（YSFH）
「コオロギの生得的行動の変化」* 廣田亮太郎，蒲原実希也，中鶴奨，西田みのり，原田寛，平松梨花（兵庫県立神戸高等学校）
「南関東におけるヒガシシマドジョウの遺伝的多様性」* 三内悠吾，上野拓翔，横溝健（海城中学高等学校）
「外敵から逃げたゴキブリはその後どのようにふるまうか？」* 春日井翔大（岐阜県立多治見高校），柴田陽斗（岐阜県立多治見高校），水野皓太（岐阜県立多治見高校），中島岳人（岐阜県立多治見高校），志津隆行（岐阜県立多治見高校），阿部真人（理化学研究所），佐賀達矢（岐阜県立多治見高校）
「プラナリアの耳葉のはたらき」* 久池井美賀子，吉田早希（福岡県立城南高等学校）
「虫除け剤を使用せず蚊に刺されないにはー安全性からみた代替成分・最適温度の提案ー」* 武田真依（神戸大学附属中等）
「クロゴキブリはなぜ滑空できるのか、チャバネゴキブリはなぜ滑空できないのか」* 山添和花，棚倉淳朗，吉田拓真，杉本渓都，川上和美，蔦川拓真，西浜崇登，寶谷唯（兵庫県立西脇高等学校）
「普通ヒドラがグリーンヒドラに与える影響」* 梁瀬智輝（福岡県立城南高等学校）

【ナチュラルヒストリー賞】
「稲の吸水の仕組みと日周リズムについて」* 前田彩花（清心女子高等学校）
「シロツメクサの過剰繁殖抑制と根粒菌」* 神頭優理菜，黒田紗希（愛知県立明和高等学校）
「知花城跡における植生の現状と変遷」* 小渡寛子，殿村悠子，普天間ちおり（球陽高等学校）
「ノゲシとオニノゲシの分布と繁殖戦略」* 佐々木洸大，石嶋健吾，佐藤尊宏，鈴木悠人（海城中学高等学校）
「絶滅危惧種ミツガシワの命をつないだものとは？～知られざるその生態に迫る～」* 後藤歩，丑田智佳，加藤里佳子，重松あかり（日田高等学校）
「ヒメザゼンソウの開花傾向と越冬戦略」* 山下愛，植木玲一（北海道札幌啓成高校）
「植生遷移に伴うイタドリパッチの植物と土壌動物の多様性の変遷」* 源迅兵，神澤由己，寺島優響（国分寺高校）
「シハイスミレとその狭葉変種マキノスミレの関係を探る」* 廣瀬彩邑里，小堀玲奈，山下和真（兵庫県立小野高等学校）
「土壌バクテリアが植物の生育に与える影響」* 山本勝吾，工藤海翔，松本幸子，関根康介（立命館慶祥高等学校）
「水中で生きるフィリピンウォータークローバーの生存戦略の研究」* 中原美咲，西井香奈（清心女子高等学校）
「猫耳のような手触りの葉を形成する *Stachys byzantina* のトライコームの役割」* 千葉宝（YSFH）
「三原山の開拓者イタドリの研究」* 戸屋花梨，鴇田奈那（国分寺高校）
「花由来の野生酵母による還元反応の可能性を探る」* 小林愛佳，窪内胡桃（清心女子高等学校）
「葉鞘に水を貯める植物根ネオレゲリアの葉の構造」* 小林生知（YSFH）
「高砂海浜公園のグリーンタイドの原因解明」* 米山玲緒，辻川崇史，笠原佑斗，久谷悠流，大塚菜月（加古川東高等学校）
「里山における希少生物の生息状況と保全活動：京都府やましろ地域における例」* 中西康太（京田辺市立大住中学校，やましろ里山の会）
「海への溶存鉄供給に貢献する淡水生シアノバクテリア」* 澤田晟斗，石岡晃大，佐藤萌衣，中谷朱里，松田有加（加古川東高等学校）
「越谷北高校周辺の水生生物を探る」* 川上瞭，木本颯，小山凌太郎，大隅葉久（越谷北高等学校）
「手洗い後の乾燥方法における、最適な乾燥媒体とは」* 中島友香（神戸大学附属中等）
「菌根菌と腐生菌の気象要因との関係～六甲山におけるキノコの観察記録から探る～」* 野中涼夏，石橋智尋，

松本拓磨，田中茉子，苗村明星，服部虎太郎，森下一輝，張琳華，志村美樹（兵庫県立御影高等学校）
「甲殻類に付着する珪藻の種組成」* 中野和真（海城中学高等学校）
「カワニナの寄生虫に関する研究」* 西田俊哉, 木田大貴, 遠山敬仁，今津荘吾，小森一生，瓦田蒼良（岐山高等学校　生物部）
「アライグマが好む環境の分析」* 山田拓海, 近藤花音（埼玉県立越ヶ谷高校）
「ダム湖に定着できた琵琶湖系アユ　～生態と由来について～ Ayu in Lake Biwa has settled in Takihata Dam Lake - About its ecology and origin」* 岡本鼓都里, 近藤流有（大阪府立富田林高校）
「ウナギのモノの見え方と認識」* 中谷朱里，岸優美花，鷹濱えりな（加古川東高等学校）
「遺伝子マーカーを用いた淡水魚に寄生する吸虫の生活環の解明」* 板谷穂香，藤本暖，鈴木大登，眞下篤（白陵高等学校）
「高校生による外来生物研究グループ「チームアライグマ」の活動」* 千葉柚乃（越谷北高等学校）, 山田拓海（越ケ谷高等学校），長谷川聖龍（坂戸西高等学校），棚村雅妃（川越女子高等学校），毛利穂香（蕨高等学校），米山夏葵（越谷北高等学校），前田夕里花（越谷北高等学校），田中歩（越谷北高等学校），田中千尋（越谷北高等学校）, 角田晴香（越谷北高等学校）, 木村理乃（越谷北高等学校）
「ポートアイランド南公園におけるアルゼンチンアリ駆除方法の考察」* 大河内徳人（神戸大学附属中等）
「石川におけるチリメンカワニナの生息状況」* 輿石美優（大阪府立富田林高校），福永大地（大阪府立富田林高校）
「ハエトリグモの捕食行動」* 衛藤聡太，合田楓（大分舞鶴高等学校）
「マリーゴールドによる殺センチュウ効果の検証」* 洲河青，池田拓人，小島凛太郎，瀧口紗矢，福原悠介，元村亘輝（兵庫県立神戸高等学校）
「オランウータンとチンパンジー、遊びが好きなのはどっち？ 」* 黒田峻平，伊藤大生，越川峻乃介（海城中学高等学校）
「鳥類の嘴峰長と食性の関係」* 工藤海翔，松本幸子，関根康介（立命館慶祥高等学校）
「核遺伝子解析によるトゲワレカラ *Caprella scaura* の生殖的隔離の解明」* 大路紘裕，森美月，長谷千波矢，伊東涼風，江村郁琉（兵庫県立尼崎小田高校）
「古瀬池に生息するタモロコ属魚類の形態および分類学的研究」* 西原宏之，小畑瑛資，久保杏奈，大橋孝祐，小林結意，松尾咲奈（白陵高等学校）
「メジロの亜種や性別は声で識別できる？」* 知覧稜馬，服部太陽，張珠煐，山口智愛，岩崎柊都，吉武那津希，小川もも菜，西川竣，東実文，野村大翼（大阪府立岸和田高校）
「ミズクラゲにおける感覚器と傘の開閉運動の関係」* 松永悠奈，西脇千晃（清心女子高等学校）
「武庫川産ユリカモメ *Larus ridibundus* の研究－遺伝子解析の結果―」* 小寺美菜子，大路紘裕，長谷千波矢（兵庫県立尼崎小田高校）
「チャバネゴキブリの単為生殖の可能性に関する研究」* 小松環斗，長沼涼一，松本幸子，関根康介（立命館慶祥高等学校）
「神戸市周辺の外来淡水シジミの調査」* 美田啓太，稲吉詢大, 坂東丈志郎, 前田雅志（兵庫県立神戸高等学校）
「静岡市巴川流域周辺住民への外来カメ類に関する意識調査」* 織田梨菜, 篠崎奏, 秋澤俊希（静岡北高等学校）
「カタツムリはどうやって餌を探している？」* 志津隆行，中島岳人，下総郁子，佐賀達矢（岐阜県立多治見高校）
「始祖鳥の滑空能力を推定してみた」* 林瑞貴，平間心菜（大阪府立富田林中学校）
「坂戸市周辺における外来生物の生息調査」* 長谷川聖龍，上荒磯駿，内村優太，大津脩，山田俊介，石井貴大，齊藤康太（坂戸西高等学校）
「1913 年購入のヤマネコ剥製標本はツシマヤマネコか？」* 和田夏穂，松本涼佳，矢野琢巳（大阪府立岸和田高校）
「メダカの保留走性」* 岩佐洋太，大関弘，木村夏希，吉田光輝，加藤茉生子（愛知県立明和高等学校）
「須磨産ウミホタル *Vargula hilgendorfii* の生活史の解明」* 長谷千波矢，大路紘裕，田中愛，原田侑季，荒木岳士，藤堂恭行，山木文汰，森美月（兵庫県立尼崎小田高校）
「魚の体の形成はどのような条件によって決まるのか」* 小穴快音，上西佑弥，中村奏斗，杉本拓海（大阪府立富田林中学校）
「Ecological Study on the sika deer that live in Nangu Mt. ～ Behavior survey using a GPS collar and trail camera ～」*Mirai Furuta, Mana Urano, Ayumi Uemoto (Fuwa High School)
「尼崎運河におけるチチブとヌマチチブの雑種の探索」* 中西優希奈，大路紘裕，江村郁琉，田中愛，山木文汰，藤堂恭行（兵庫県立尼崎小田高校）
「ヒダサンショウウオの産卵行動の解明」* 三宅遥香（私立鶯谷高等学校）
「岸和田城水濠産テナガエビと河川産テナガエビの遺伝的差異」* 前川萌依，仲林光咲（大阪府立岸和田高校）
「学校林における地上徘徊性動物の多様性と季節変化」*Kureha Isozumi（Todo Senior High School）
「外来生物カワリヌマエビ属の生態的研究」* 棚村雅妃，田畑明日香，飛田結衣，松尾雪乃，矢野光子（埼玉県立川越女子高校）
「大阪府南部泉州地域の害獣の分布についての研究」* 濵野紗耶加（大阪府立岸和田高校）
「埼玉県における野生アライグマの生息状況」*Honoka Mouri, Ryosei Kobayashi, Haruka Sogawa, Haruna Ichimura, Mizuki Okuzawa, Rui Kaneko, Takeru Kikuchi, Daiki Takahashi, Haruka Taguchi, Kotomi Takatsu, Honoka Namiki (Warabi High School)
「地中トラップで得られた節足動物群集」* 脇村涼太郎（兵庫県立相生高等学校）
「多摩川河口の干潟におけるカニの分布」* 幡野大樹，

村尾幸太郎，鈴木大聖，藤井俊輔（筑波大学附属駒場高校）
「プラナリアの在来種と外来種の食性行動に違いはあるのか」* 丸田裕介，藤原俊太，小口あゆむ，玉置玲奈，大谷颯生（兵庫県立宝塚北高校）
「カラスバトは何を好むのか？生息場所と食性の嗜好性」* 相川理彩子，小杉茉友子，藤島優也（都立国分寺高等学校）
「メダカの海水への適応性」* 福井亮太，村山綾亮，木村乃依，澤部美里，泉谷有紗，守岡莉彩，中川郁己，松本裕子，松本七海，藤原葵（飾磨高等学校）
「魚の体色は身を守るのか」* 吉澤梨桜，山本莉里花，中岡凜緒（大阪府立富田林中学校）
「伊丹市昆虫館チョウ温室におけるチョウの口吻長と訪花植物の花筒長の関係性」* 大西裕（川西明峰高等学校）
「プラナリアの外来種はどこまで広がるか」* 安岡凜，金剛麻衣子，井上和奏，久保田空（三田祥雲館高校）

英語口頭発表賞受賞者

＜ Plant ecophysiology/Material cycling ＞

【Best Award】

"Latitudinal changes in leaf, shoot, and stem traits of Fagaceae in East Asia: focusing on species turnover and intraspecific variation" *Kiyosada KAWAI, Naoki Okada (Kyoto Univ.)

【Excellent Award】

"Root exudation as a major dimension of root traits among co-existing woody species in a deciduous-evergreen community" *Lijuan SUN (Peking University), Mioko Ataka (Kyoto University), Mengguang Han (Peking University), Yunfeng Han (Peking University), Dayong Gan (Peking University), Biao Zhu (Peking University)

"Regulation of leaf flushing in dipterocarps in aseasonal Southeast Asia" *Masaki J KOBAYASHI (JIRCAS), Kevin Kit Siong Ng (FRIM), Soon Leong Lee (FRIM), Norwati Muhammad (FRIM), Naoki Tani (JIRCAS)

＜ Evolution ＞

【Best Award】

"When parasites are selected to kill the young" *Ryosuke IRITANI, Elisa Visher, Mike Boots (UC Berkeley)

【Excellent Award】

"Rapid morphological change to the urban environment of invasive toad in Australia" *Hirotaka KOMINE (Tokyo Univ Agri Tech), Koichi Kaji (Tokyo Univ Agri Tech), Lin Schwarzkopf (James cook univ.)

"Loss of shell coiling: adaptation to wave-swept rock surfaces and symbiotic life in sea urchin pits" *Luna YAMAMORI, Makoto KATO (Kyoto Univ.)

＜ Landscape ecology/Ecosystem management ＞

【Best Award】

"Marine and coastal cultural ecosystem services: Current status and future prospect in Japan" *Misako MATSUBA (JAMSTEC)

【Excellent Award】

"Assessing extent of forest disturbances by tropical cyclones on Sundarbans Mangrove Forests using 30-year Landsat images" *Mohammad shamim hasan MANDAL, Tetsuro Hosaka (IDEC, Hiroshima Univ.)

＜ Animal population ＞

【Best Award】

"A society with queens but without males: genetic structure of the ant *Monomorium triviale*" *Naoto Idogawa, Shigeto Dobata (Kyoto University)

【Excellent Award】

"Temporal dynamics of genetic structure of a *Daphnia pulex* population since the early colonization: analysis using varved sediments and dormant egg" *Yurie Otake (University of Tokyo), Hajime Ohtsuki (Tohoku University), Jotaro Urabe (Tohoku University), Yoshihisa Suyama (Tohoku University), Ayumi Matsuo (Tohoku University), Shun Hirota (Tohoku University), Shigeko Kimura (Univ. of Shiga Pref.), Kazuyoshi Yamada (Mus. of N&E History), Takehito Yoshida (RIHN, University of Tokyo)

＜ Behavior ＞

【Best Award】

"Urbanization and cognitive performance in Eurasian red squirrels" *Pizza ka Yee CHOW (Hokkaido Univ.), Kenta UCHIDA (Hokkaido Univ.), Auguste von BAYEN (Max Planck Institute), Itsuro KOIZUMI (Hokkaido Univ.)

【Excellent Award】

"Copy or innovate: chemical recognition underlies contrasting responses to conspecific cues in bean beetles" *Ryoga OTAKE, Shigeto DOBATA (Kyoto Univ.)

＜ Life history of animals/Animal community/Animal-plant interaction ＞

【Best Award】

"Maintaining mechanism of the dimorphism in leaf trichome production of *Persicaria lapathifolia*" *Hiroki MATSUDA, Shohei SHIRAHAMA, Makoto TOKUDA (Saga Univ.)

【Excellent Award】

"Temporal change in stochastic and deterministic processes of community assembly in a plant-herbivore system" *Naoto SHINOHARA (Univ. of Tokyo), Takehito YOSHIDA (RIHN, Univ. of Tokyo)

"Geographic variation in growth history and habitat use among local populations of ayu, a migratory fish" *Iki MURASE, Kei'ichiro IGUCHI (Nagasaki Univ.)

"Relationship between spatial Taylor's power law exponent and body size is hump-shaped in fish population—implications for fisheries management"*Ruo Yu PAN (Natl Taiwan Univ.), Chih-hao HSIEH (Natl Taiwan Univ.), Ting-chun KUO (Natl Taiwan Ocean Univ.)

＜ Biodiversity ＞

【Best Award】

"Light-level geolocators and phylogeography reveal the evolutionary uniqueness of the Japanese-endemic migratory bird subspecies" *Daisuke AOKI (Hokkaido Univ.), Haruna SAKAMOTO (Hokkaido Univ.), Hiroaki MATSUMIYA

(Sinshu Univ.), Munehiro KITAZAWA (Hokkaido Univ.), Masaoki TAKAGI (Hokkaido Univ.)

【Excellent Award】

"A historical meta-analysis of aquatic plant community in Japanese archipelago during the last 110-years" *Ji yoon KIM, Jun NISHIHIRO (Toho Univ.)

＜ Plant population/Plant community/Succession and regeneration ＞

【Best Award】

"Being epibionts: micro-distribution of sessile organisms on a living gastropod" *Yumiko OSAWA, Mutsunori TOKESHI (AMBL, Kyushu Univ.)

【Excellent Award】

"Ecotypic variations in reproductive system and morphological traits in *Vaccinium vitisidaea* in Hokkaido" *Akimi WAKUI, Gaku KUDO (Hokkaido Univ.)

Ⅲ．業務執行理事の選任について

2019 年 3 月 18 日に 2019 年度第 1 回理事会が行われ業務執行理事が選任された。

業務執行理事（任期：2019 年 3 月～ 2021 年 3 月）

永松　大（専務理事）
三木　健（庶務担当理事）
黒川　紘子（会計担当理事）

Ⅳ．書評依頼図書（2018 年 9 月～ 2019 年 4 月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 山口裕文監修　宮浦理恵・松嶋賢一・下野嘉子編集「雑草学入門」（2018）336pp. 講談社　ISBN:978-4-06-512952-4
2. 永宗喜三郎・島野智之・矢吹彬憲編「アメーバのはなし―原生生物・人・感染症―」（2018）152pp. 朝倉書店　ISBN:978-4-254-17168-6
3. 帰山雅秀著「サケ学への誘い」（2018）214pp. 北海道大学出版会　ISBN:978-4-8329-8231-4
4. 長谷川眞理子「世界は美しくて不思議に満ちている『共感』から考えるヒトの進化」（2018）248pp. 青土社　ISBN:978-4-7917-7101-1
5. 増田隆一編「日本の食肉類　生態系の頂点に立つ哺乳類」（2018）314pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060237-2
6. Allan F. O'Connell, James D. Nichols and K. Ullas Karanth 著　飯島勇人・中島啓裕・安藤正規訳「カメラトラップによる野生生物調査入門　調査設計と統計解析」（2018）336pp. 東海大学出版部　ISBN:978-4-486-02159-9
7. 中静透・河田雅圭・今井麻希子・岸上祐子編「生物多様性は復興にどんな役割を果たしたか　東日本大震災からのグリーン復興」（2018）224pp. 昭和堂　ISBN:978-4-8122-1734-4
8. 木下直之著「動物園巡礼」（2018）298pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-083077-5
9. 岩槻邦男著「ナチュラルヒストリー」（2018）372pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060256-3
10. 公益財団法人日本生命財団編「人と自然の環境学」（2019）280pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-063371-0
11. 井上吉雄編著「農業と環境調査のためのリモートセンシング・GIS・GPS 活用ガイド」（2019）176pp. 森北出版株式会社　ISBN:978-4-627-20201-6
12. 盛口満著「琉球列島の里山誌　おじいとおばあの昔語り」（2019）264pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060321-8
13. 粕谷俊雄著「イルカ概論」（2019）336pp. 東京大学出版会　ISBN:978-4-13-060238-9
14. Mark Vellend 著 松岡俊将・辰巳晋一・北川涼・門脇浩明訳「生物群集の理論　4 つのルールで読み解く生物多様性」（2019）288pp. 共立出版　ISBN:978-4-320-05788-3
15. 鹿児島大学鹿児島環境学研究会編「奄美のノネコ猫の問いかけ」（2019）282pp. 南方新社　ISBN:978-4-86124-400-1

Ⅴ．寄贈図書

1. 「海洋地質図 No.90 沖縄島何部周辺海域海洋地質図」（2018）産業技術総合研究所　地質調査総合センター
2. 「うみうし通信　No.101」（2018）12pp. 公益財団法人水産無脊椎動物研究所
3. 「北海道爬虫両棲類研究報告書　Vol.6」（2019）48pp. 北海道爬虫両棲類研究会
4. 「中部山岳国立公園立山ルート緑化研究報告書　第 4 報」（2018）152pp. 立山ルート緑化研究委員会
5. 「第 34 回　国際生物学賞授賞式　記録」（2019）44pp. 国際生物学賞委員会事務局
6. 「第 17 回世界湖沼会議（いばらき霞ヶ浦 2018）開催報告書」（2019）212pp. 第 17 回世界湖沼会議実行委員会

書　評

須賀丈・岡本透・丑丸敦史（2019）「草地と日本人［増補版］縄文人から続く草地利用と生態系」築地書館　280pp. ISBN:978-4-8067-1576-4　本体価格 2,400 円＋税

本書は 2011 年に出版された初版からの 7 年ぶりの増補版であり、草原・草地に関わる研究者にとどまらず、日本の今と未来をいきるあらゆる人々に一読をおすすめしたい良書といえる。初版については既に書籍販売サイト等でも高く評価されており、学会員では手に取られた方も多いに違いない。

本書が扱うテーマは時間・空間ともに壮大である。本書の舞台は時間を現代から縄文、後氷期にまでさかのぼ

る。空間的にも、現在残る草地は国土の「わずか1%」だが、ほんの100年ほど前の「明治後半には13%」と、今の住宅地、水田周り、森林、身近な山の頂までも草地であったという。口絵の「日本の土壌図」で示される全国にわたる黒色土の分布がそれを裏づけているという。現代人の多くは数十年前、あるいは今でも日本は「森の国」と考えており、「草原が日本の重要な生態系のひとつである」ことをあまり認識していないかもしれない。本書は、現在にわずかに残り、今なお管理放棄の危機にある草地がどのように成立し、その過程で人がどう関わってきたのかをひも解いていく。

本書は序章と3章で構成され、各々を昆虫、土壌、植物を専門とする「草地研究の第一人者」が執筆している。序章は明治期の軽井沢から始まる。ここでは、本書のねらいが、草地の歴史を探るキーパーソンである黒色土、草原性の植物や昆虫とともに紹介される。明治時代と現在の遠景写真の比較が草地環境の急減を脚色なく物語る。続く第1章では、「日本と大陸の草原を、歴史と地理の二つの面からむすびつける」。九州から北海道までの草原性生物の隔離的な分布と、数々の文字史料に断片的に残る記録から、約1万年前頃からの日本列島の草原と草原性生物の由来とその変遷を丁寧にたどっていく。第2章では、更新世末期（約2万年前）以降の気候変動下での植生変遷から、人間活動が活発となった縄文時代以降のイネ科植物の変遷までが復元される。その基盤となるのは近年盛んに行われた花粉分析、土壌中に含まれる植物珪酸体や有機物の安定同位体比、微粒炭分析等の自然科学研究の蓄積だ。さらに、絵画・文書史料に基づく考古学的・歴史学的な研究蓄積から、「江戸時代の日本列島は眺めがよかった」ことが明らかにされる。第3章は「畦の上の草地を中心とした里草地」が舞台だ。里草地とは、約2000年前の「水稲文化の導入とともに人の手によって新たに作り出され、日本中に広がった」半自然草地である。里草地の歴史と保全に関する近年の学術研究成果を踏まえ、里草地に見られる環境の多様性、そこで「自然攪乱・人為攪乱に適応」して生育してきた希少動植物、現在「田んぼのまわりにわずかに残った草地」を保全する方策について議論される。

増補版での主な変更点は、初版出版以降の最新研究成果や実践活動の展開、また新たに関連が明らかになった古史料の追加である。ページ数でいうと10ページ強、著者の一人によると100か所以上におよぶという。例えば、生物標本資料を用いたDNA解析結果や世界農業遺産の動向などが挙げられる。7年という比較的短い期間での増補版出版は、本書の扱うテーマがまさに現在進行形の急展開をみせていることを示している。もう一つ注目したいのが、タイトルの副題が「日本列島草原一万年の旅」から「縄文人からつづく草地利用と生態系」に変更された点である。本書の趣旨がより人の利用に焦点があてられ、「自然とひととがからみあう過去と未来」を踏まえ、「今後の姿を考えること」が強調されたように感じられる。

本書の特筆すべき点は、何といっても多岐の分野にわたる豊富な知識と史料に基づく丁寧な裏づけだ。本書が扱う分野は、生物地理学、生態学、古生物学、土壌学、歴史学、考古学、（文化）人類学等にまで渡る。絵画史料の例を挙げると、古地図、屏風や絵葉書、文字史料は万葉集をはじめとする和歌、律令や日記、その他神事にまでおよぶ。これら断片的にちらばる「見過ぎされてきた手がかり」を草原分布と利用の視点からつむぎあげ、専門知識のない読者を置き去りにしない丁寧な論旨で、草原の変遷をまとめ上げた著者らの学識の広さと知識の融合力に感嘆せざるを得ない。

本書を読み終えた後、特に印象に残るのは、「1万年にわたる草原の歴史はヒトが意図したものというより、さまざまな偶然に助けられたものと考えるべき」ことだ。近年の保全科学は今あるものに手をつけない環境保全から、目指すべき方向性を明確にし、場合によって人が関与する生態系管理へと変化してきた。本書は目指すべき方向性を考える上で、今あるものの過去とそれに関わる人の営みを理解することの重要性を問い直している。初版を未読の方はもちろんのこと、既読の方にも今一度手に取ってほしい1冊である。

（森林総合研究所　小山明日香）

山田俊弘（2018）「論文を書くための科学の手順」文一総合出版　320pp. ISBN:978-4-8299-6531-3　本体価格1,800円＋税

本書によると日本には68万3000人の科学者（＝研究者）がいるという。科学者のすべてが博士の学位を持っているわけではなく、博士のすべてが科学者というわけでもないが、「末は博士か大臣か」という言葉があり、かつて科学者は立身出世を体現する職業であったし、今でも子どもたちのあこがれの職業のひとつである。本書では、学研教育総合研究所の2016年調査において、小学生の将来つきたい職業として「科学者・研究者」が第14位（男女合計）であったことが紹介されている。もうひとつ例をあげると、第一生命が30年間にわたって幼児・小学生を対象におこなっている「大人になったらなりたいもの」アンケートでは、「学者・博士」は男児における上位の常連であり、最新の2018年調査では「サッカー選手」・「野球選手」に次いで3位、2017年ではそれらを抑えて1位であった。なぜ科学者は子どもたちのあこがれの職業なのだろうか？

世間の科学者のイメージを、オーキド博士（テレビアニメ、ポケモンの登場人物）の例から、「権威をもち、人々に何かを説明する人」として、あえて胡散くさく提示する所から本書は始まる。科学者の権威は科学の正しさから生じる。では、科学者がおこなう科学の正しさはどのように担保されているのだろうか？本書の主張によると、答えは次のとおりである。**科学者に共通する項は、「仮説演繹の展開で科学を進めること」になる**（原文太字）。以上から、本書の結論として、以下が導かれる。**仮説演繹の論理にのせ、仮説から予言を演繹し、その予言に対して実証データが示せていれば、それが科学でいう「わかった」なのである**（原文太字）。

本書の結論をかいつまんでいえば以上であり、仮説演

繹が強力な科学の方法であることを、本書は様々な例を用いて説明する。アントニオ猪木最強説、「薄皮饅頭はすべておいしい」仮説の例などもおもしろかったが、本書の著者と同じく熱帯林を研究する評者にとっては、熱帯林研究歴 25 年の著者の研究史の紹介ともなっている第 8 章が大変エキサイティングであった。仮説演繹の伝道者たる著者にとってはあの中立論も恐れるに足らず。実証不能で問題設定に間違いがあると喝破するあたりは、痛快である。

一方で評者は思うのである。本書では、仮説演繹によらず「権威を盾に自論をふりかざす」とディスられるオーキド博士だって、やはり正しい科学者の姿なのではないかと。オーキド博士の「このポケモンはこうした特性があるというたぐいの説明や紹介」をサトシが受け入れるのは、ほんとうにサトシがいたいけなせいだけなのだろうか。ファーブルやシートンのような記述スタイルは、ほんとうにもう時代遅れなのだろうか。

ファーブル、シートン、そしてオーキド博士だって科学者らしいと感じるのは評者だけではないだろう。仮説演繹によらずとも、彼らが科学者らしく見え、そして彼らに権威を感じるのはなぜだろうか？本書で指摘されるとおり、科学とは「知識を生み出す過程」であり、さらに、科学には「正しさ」と「新しさ」が必要である。ところが、たとえ仮説演繹によっても、科学の知識に絶対的な「正しさ」は保障されない。科学の知識とはあくまで仮説であって、「**科学として仮説が『正しい』と断言される日が来ることは永遠にない**」(原文太字)のである。そうであれば、その知識の普遍性（自然界一般に成立する厳密な正しさ）にあまりこだわる必要はなく、個別の研究対象について「新しい知識」を生み出していれば、それで十分科学たりうるのではないだろうか。一般人はポケモン Go でいろんなポケモンを探すだけで満足し、ポケモンマスターは自分のポケモンだけは詳しいとしても、他個体・他種のポケモンの生態を詳しく調べる時間も予算もないだろう。オーキド博士の研究所の運営費がどこから出ているかは知らないが、オーキド博士だけがほかの誰も詳しくは調べない多種多様なポケモンの生態を個体差も把握しつつ調べているのではないだろうか。ほかの誰も調べていない以上、オーキド博士の研究が生み出す知識はすべて「新しい知識」であり、それゆえわれわれはオーキド博士の説明を受け入れるのである。そして、世間一般から必要とされる科学者とは、オーキド博士のような、他のだれよりもその対象について詳しく調べ、「新しい知識」を生み出し続けるエキスパートのことではないだろうか。（だから科学者が研究不正をすると、私たちは簡単にだまされてしまうのである。）

論文作成に行き詰まっている読者は、本書を読んで、自分の研究を仮説演繹という観点から見直すことで、もしかしたら論文が書けるようになるかもしれない。しかし、本書にはそのような実用的観点だけでは測れないおもしろさがある。本書は「論文を書く」具体的な作成法を詳しく解説した書ではない。あくまで「科学の手順」についての根源的考察、すなわち、「科学論」である。本書は果てしない知的好奇心と疑問と思考を読者の中に呼び起こす。それが本書の一番の魅力である。

（鹿児島大学理学部地球環境科学科　相場慎一郎）

一般社団法人日本生態学会
役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長）　占部城太郎　2018.3 ～ 2020.3

業務執行理事

（副会長・次期会長候補）

	湯本　貴和	2018.3 ～ 2020.3
（専務理事）	永松　大	2019.3 ～ 2021.3
（庶務担当）	三木　健	2019.3 ～ 2021.3
（会計担当）	黒川　紘子	2019.3 ～ 2021.3
（広報担当）	中川弥智子	2018.3 ～ 2020.3
（出版担当）	久米　篤	2018.3 ～ 2020.3
（大会担当）	吉田　丈人	2018.3 ～ 2020.3

理事（2018.3 ～ 2020.3）

巌佐　庸	丑丸　敦史
内海　俊介	大澤　剛士
佐竹　暁子	鈴木まほろ
陶山　佳久	東樹　宏和
中野　伸一	西廣　淳
宮下　直	可知　直毅

監事

粕谷　英一	2018.3 ～ 2020.3
陀安　一郎	2019.3 ～ 2021.3

代議員（2017.12 ～ 2019.12）

全国代議員	相場慎一郎	巌佐　庸
	内海　俊介	占部城太郎
	大澤　剛士	粕谷　英一
	川北　篤	工藤　岳
	五箇　公一	佐竹　暁子
	陶山　佳久	瀧本　岳
	東樹　宏和	中野　伸一
	西廣　淳	
地区代議員	岸田　治（北海道）	鈴木まほろ（東北）
	赤坂　宗光（関東）	北村　俊平（中部）
	丑丸　敦史（近畿）	
	宮竹　貴久（中国・四国）	
	矢原　徹一（九州）	

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief		仲岡　雅裕
Deputy Editor-in-Chief		陶山　佳久
Associate Editors in-Chief	伴　修平	半谷　吾郎
	飯島　勇人	鏡味麻衣子
	木庭　啓介	小林　真
	小杉　緑子	松浦　健二
	宮澤　真一	中村　誠宏
	大塚　俊之	長田　典之
	瀧本　岳	玉木　一郎
	Ming Dong	Bo Li
	Zhijun Ma	Stephanie A. Bohlman

Handling Editors

江成　広斗	深澤　圭太
福井　大	濱村奈津子
半場　祐子	平田　竜一
日浦　勉	兵藤不二夫
市栄　智明	今井　伸夫
稲垣　善之	石川　尚人
角谷　拓	梶　光一
上條　隆志	北村　俊平
小林　和也	工藤　岳
工藤　洋	牧野　渡
松井　一彰	松尾奈緒子
松崎慎一郎	村上　正志
中路　達郎	仲澤　剛史
西村　欣也	大橋　瑞江
岡部貴美子	大澤　剛士
大園　享司	斎藤　琢
阪口　翔太	佐々木雄大
佐藤　一憲	佐藤　拓哉
山尾　僚	横川　太一
Min Cao	Ping Xie
Franck Courchamp	Stuart J Davies
Guillaume Echevarria	Jingyun Fang
Yunting Fang	Jan Frouz
Raghavendra Gadagkar	Rhett D. Harrison
Brenden Holland	Sun-Kee Hong
David W. Inouye	Eun-Shik Kim
Mathew A. Leibold	Andrew M. Lohrer
Jeremy T. Lundholm	Tsewang Namgail
Ariel Noveplansky	Pil Sun Park
Jeremy J. Piggott	Nishanta Rajakaruna
Sergio R. Roiloa	Stephen D. Sebestyen
Bo Song	E. Ashley Steel
Janne Sundell	Cindy Q. Tang
Arndt Telschow	Edward Vargo
Jae Chun Choe	Hoi Sen Yong

日本生態学会誌編集委員会（2017.1 ～ 2019.12）

編集委員長	伊東　明	
編集幹事	安房田智司	永光　輝義
	名波　哲	
編集委員	相場慎一郎	大澤　剛士
	岡野　隆宏	鏡味麻衣子
	笠原　玉青	草刈　秀紀
	古賀　庸憲	小林　剛
	今藤　夏子	島野　光司
	白川　勝信	髙田　宜武
	土田　浩治	東樹　宏和
	戸丸　信弘	中川弥智子
	箱山　洋	肘井　直樹
	嶺田　拓也	三宅　崇
	村岡　裕由	村上　貴弘
	山浦　悠一	和穎　朗太

保全生態学研究編集委員会（2018.1 ～ 2020.12）

編集委員長　小池　文人
編集幹事　西廣　淳　佐々木雄大
編集委員　天野　達也　岡野　隆宏
五箇　公一　戸田　光彦
曽我　昌史　丑丸　敦史
金子　信博　高田まゆら
鈴木　覚　露崎　史朗
河口　洋一　立原　一憲
岩井　紀子　北村　亘
小池　伸介　岸本　康誉
佐伯いく代　今藤　夏子
石濱　史子　横溝　裕行

自然保護専門委員会（2018.4 ～ 2020.3）

委員長　吉田　正人：環境政策（自然公園／種の保存法）
副委員長　和田　直也：中部
幹事　須賀　丈　：中部
地区選出委員
露崎　史朗：北海道
紺野　康夫：北海道
星崎　和彦：東北
黒沢　高秀：東北
亘　悠哉：関東
奥山　雄大：関東
野間　直彦：近畿
中井　克樹：近畿
井上　雅仁：中国・四国
伊谷　行　：中四・四国
逸見　泰久：九州
伊澤　雅子：九州
内貴　章世：九州
専門別委員　増沢　武弘：高山・亜高山
竹門　康弘：陸水
加藤　真　：海洋
清水　善和：島嶼
久保田康裕：熱帯・亜熱帯
横畑　泰志：寄生生物
阿部　晴恵：遺伝子
常田　邦彦：鳥獣管理
竹中　千里：大気汚染
矢原　徹一：海外渉外
安渓　遊地：エネルギー問題
角野　康郎：湿地
水谷　瑞希：MAB
神山　智美：環境法
大久保奈弥：海洋
五箇　公一：外来種

将来計画専門委員会（2018.4 ～ 2020.3）

委員長　佐竹　暁子
辻　和希　巌佐　庸
粕谷　英一　酒井　章子
奥田　昇　五箇　公一
田中　健太　中丸麻由子
小泉　逸郎　立木　佑弥
三木　健　北島　薫
森長　真一　塩尻かおり
彦坂　幸毅　黒川　紘子
土居　秀幸　山道　真人
大串　隆之　佐藤　拓哉
石川　麻乃

生態学教育専門委員会（2018.4 ～ 2020.3）

委員長　畑田　彩
副委員長　中田　兼介
非教育学部系枠：
嶋田　正和　西脇　亜也
教育学部系枠：
平山　大輔　丑丸　敦史
三宅　崇　中井　咲織
高校教員枠　広瀬　祐司　宮田　理恵
佐賀　達矢
博物館枠　澤邊（中村）久美子　小林　誠

大規模長期生態学専門委員会（2018.4 ～ 2020.3）

委員長　大手　信人
石原　正恵　伊東　明
内海　俊介　黒川　紘子
木庭　啓介　中野　伸一
中村　誠宏　松崎慎一郎
村岡　裕由

生態系管理専門委員会（2018.4 ～ 2020.3）

委員長　鎌田　磨人：里山・協働
副委員長　西廣　淳　：河川・湖沼・防災
幹事　橋本　佳延：里山林・草原・協働
幹事　西田　貴明：協働・制度設計
松田　裕之：野生生物管理
角野　康郎：湖沼・河川・湿地
古賀　庸憲：海洋
塩坂比奈子：普及
高村　典子：陸水
竹門　康弘：河川
津田　智　：草原・湿地
富田　涼都：環境社会学
中越　信和：景観生態
中村　太士：河川
日鷹　一雅：水田・農業生態系管理
平吹　喜彦：震災復興
逸見　泰久：渚・海洋
正木　隆　：森林・林業
村上　興正：自然保護
谷内　茂雄：流域管理モデル
矢原　徹一：保全生物学
山田　俊弘：森林
白川　勝信：湿原・草原・協働・制度

山下　慎吾：河川

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

井鷺　裕司　　北島　薫
東樹　宏和　　内海　俊介
岡部貴美子　　三木　健

大会企画委員会

委員長　内海　俊介
副委員長　幸田　良介
運営部会　直江　将司　　酒井陽一郎
立木　佑弥　　田邊　晶史
潮　雅之　　堤田　成政
宇野　裕美　　幸田　良介
（Web）　斎藤　琢　　三村真紀子
（広報）　岸田　治　　橋本　佳延
シンポジウム部会
川西　基弘　　吉田　勝彦
池川　雄亮　　吉田　智弘
太田　民久　　伊藤江利子
川西　亮太　　境　優
阿部　真人　　磯村　尚子
門脇　浩明　　吉村真由美
発表編成部会
高見　泰興　　兵藤不二夫
谷口　義則　　福井　大
北西　滋　　小沼　順二
伊津野彩子
ポスター部会
竹内　勇一　　高橋　一男
澤田　佳宏　　長田　典之
末次　健司　　赤坂　宗光
伊藤　健彦　　清水　加耶
土岐和多瑠　　比嘉　基紀
鍋島　絵理　　吉竹　晋平
長谷川成明
高校生ポスター部会
栗山　武夫　　高木　俊
三宅　崇　　馬場　友希
櫻井　麗賀　　水澤　玲子
岡本　朋子　　片山　直樹
中浜　直之　　中村　圭司
佐藤　拓哉　　立木　佑弥
英語口頭発表部会
石川　尚人　　藤井　佐織
山道　真人　　天野　達也
高須賀圭三　　杉浦　大輔
深澤　遊　　照井　慧
青柳　亮太　　宇野　裕美

野外安全管理委員会

委員長　鈴木準一郎　　2018.4 ～ 2020.3
粕谷　英一　　2018.4 ～ 2020.3
石原　道博　　2018.4 ～ 2020.3
北村　俊平　　2018.4 ～ 2020.3
大舘　智志　　2019.4 ～ 2021.3
飯島　明子　　2019.4 ～ 2021.3
奥田　昇　　2019.4 ～ 2021.3

キャリア支援専門委員会（2018.4 ～ 2020.3）

委員長　宮下　直
副委員長　上野　裕介　　木村　恵
河内　香織　　小柳　知代
小山　耕平　　鈴木　智之
鈴木　牧　　曽我　昌史
高村　典子　　中坪　孝之
中村　俊彦　　西田　貴明
沼田　真也　　水野　晃子
森田健太郎
オブザーバー
可知　直毅　　黒瀬奈緒子
塩尻かおり　　富田　基史
半場　祐子　　深谷　肇一
別宮（坂田）有紀子　　三宅　恵子
荒木希和子

京都大学生態学研究センターニュース
Center for Ecological Research NEWS

京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒 520-2113 滋賀県大津市平野 2 丁目 509-3
Tel : (077) 549-8200（代表），Fax : (077) 549-8201
センター長　中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp

2019 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける 2019 年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ（http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp）で公開しています。

1．プロジェクト

大型共同研究としては、連携機関である総合地球環境学研究所（地球研）との共同企画プロジェクト「生物多様性が駆動する栄養循環と流域圏社会ー生態システムの健全性」（研究代表者：奥田 昇）が進められている。これらのほか、JST 戦略的創造研究推進事業（CREST）（1 件）・（さきがけ）（2 件）、科学研究費助成事業による研究（38 件）、民間財団寄附金による研究（11 件）なども進められている。

2．協力研究員

引き続き、協力研究員（Affiliated Scientist）を公募する。

3．共同利用・共同研究事業（次頁の表を参照）

2019 年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、9 件の共同研究（共同研究 a）、3 件の研究集会、3 件のワークショップを採択した。研究集会とワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4．生態研セミナー

前年度にひき続き、月一回程度（第三金曜日）センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室（会場への道順は、センターのホームページ参照）の予定である。

5．ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に 2 回（7 月、1 月）発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6．オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7．共同利用施設

大型分析機器：DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II（自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス）、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計 2 台が稼働している。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼動しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留されている。

シンバイオトロン：陸域モジュール、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤
安定同位体関係：木庭
観測船関係：合田
シンバイオトロン関係：高林
実験圃場林園関係：酒井

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

2019 年度　共同研究・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧

申請者	所　　属	申込内容	研　究　課　題
高巣　裕之	長崎大学大学院　水産・環境科学総合研究科	共同研究 a	大村湾における貧酸素水塊の発達とクラゲ類との関係の解明
清水（稲継）　理恵	Evolutionary and Ecological Genomics, Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	野外で生育する異質倍数体植物の遺伝子発現パターンと表現型のモデリング
荒木　希和子	立命館大学　生命科学部	共同研究 a	植物における環境応答の持続性の分子生物学的解析
勝山　正則	京都府立大学大学院　生命環境科学研究科	共同研究 a	隣接森林流域間における渓流水硝酸態窒素濃度を規定する要因の比較
富永　修	福井県立大学　海洋生物資源学部	共同研究 a	硝酸イオンの高精度同位体測定手法を用いた沿岸海域の生物生産・物質循環研究
伊藤　元己	東京大学大学院　総合文化研究科　広域システム科学系	共同研究 a	サイカチマメゾウムシの EST-SSR マーカーを利用した父性解析及び地域個体群遺伝組成の解明
高野　宏平	長野県環境保全研究所　自然環境部	共同研究 a	ナベクラザゼンソウを始めとするサトイモ科植物の送粉生態の解明
WELLS, John C.	立命館大学　理工学部	共同研究 a	Development of Acoustic Tomography for Continuous Monitoring of Cyanobacterial Blooms and Lake Currents.
Antony Dodd	Biological Sciences, Univrersity of Bristol	共同研究 a	The adaptive significance of circadian gating in naturally occurring plant populations
中野　伸一	京都大学　生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
木庭　啓介	京都大学　生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2019
木庭　啓介	京都大学　生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2019
高巣　裕之	長崎大学大学院　水産・環境科学総合研究科	研究集会	第 11 回生物地球化学研究会 2019 年度研究発表会および「有明海の生態系異変に関する現地講習会」
伊豆田　猛	東京農工大学大学院・農学研究院	研究集会	植物に対する環境ストレスの影響 - 植物生態系の機能と生物多様性の保全を目指して -
花田　智	首都大学東京大学院　理学研究科　生命科学専攻	研究集会	光合成の起源と進化、その古地球生態系における役割

センター関係者の動き

1）潮雅之氏（白眉センター・特定准教授　10 月 1 日付採用）がセンターで研究を開始しました。

2）大西雄二氏が 2 月 1 日付で研究員として採用されました。

3）田邉晶史氏・林鎬俊氏・河合清定氏が 4 月 1 日付で研究員として採用されました。

4）研究員の辻井悠希氏、岡野淳一氏が、3 月 31 日付で退職しました。

5）HOBBIE, Erik Alan 氏 ──（ニューハンプシャー大学・教授）が招へい研究員として 9 月 1 日～ 11 月 30 日滞在予定です。

6）LIU, Yang 氏 ──（河南師範大学・准教授）が、招へい研究員として 7 月 1 日～ 9 月 30 日滞在予定です。

7）WEILHOEFER, Christine Lynn 氏 ──（ポートランド大学・准教授）が、招へい研究員として 10 月 2 日～ 2020 年 1 月 31 日滞在予定です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は 1 月から 12 月までです。
新年度の会費は前年 9 月以降に請求をします。会費未納者に対しては 6 月、9 月に再請求します。

退会する際は前年 12 月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。
会費を 1 年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2 年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費 *	大会発表	選挙・被選挙権 （役員・代議員）
正会員（一般）	9500 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	○	○
賛助会員	年会費 20000 円／ 22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧下さい。

【論文投稿の権利】

・日本生態学会誌　　記事の第 1 著者および特集企画者は正会員に限る
・保全生態学研究　　正会員・保全誌定期購読者を著者に含む必要がある
・Ecological Research　　投稿権利は会員に限定されません

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

・Ecological Research　　8000 円
・日本生態学会誌　　600 円 **
・保全生態学研究　　2000 円 **

**非会員に向けた学会誌（冊子体）の定期購読料は、以下の年額となります。
・日本生態学会誌　　9,000円
・保全生態学研究　　5,000円
保全生態学研究は発行の 2 年後にオープンアクセスとなります。

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会　会員業務窓口
〒 162-0801　東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター
E-mail: esj-post@bunken.co.jp
Tel: 03-5937-2721　Fax: 03-3368-2822